序章

四角い世界

AKITO SEEMS TO DRAW A CARD

1

この世界の右端、と言っても星は丸いのだから端もなにもないのだが、とにかく世界の右端に日成都（ヒナト）と呼ばれる国があった。

四方を海に囲まれた島国で、春夏秋冬の四季を持ち、そこに住まう人々は勤勉かつ真面目（まじめ）。

国土や人口の規模はさほど大きいとも言えないものだが、その国民性もあってか十に分けられた世界のエリア、その一つを一国家のみで形成しており、世界でも上位と言ってよい豊かさを保っていた。

とは言えこの国において支配階級と労働階級の間には広くて深い溝が空いており、その貧富の差もまた世界で有数と言っていいのだがそれはこの際関係がない。

とにかく、その南北に長いヒナト国はさらに八つの地方に分けられており、その中央辺りにナカヤ地方という土地があった。

この国の中心地、コノエ地方の隣に位置し、まあまあ栄えている地方と言ってよく、ま

たこの土地の地下には多数のエネルギー鉱石が眠っており、その関係で鉱山が多く発掘作業で生計を立てる者も多い。

そしてこの物語の主人公、高槻（たかつき）アキトもそのような鉱夫の一人であった。

陽（ひ）の光も届かぬ暗い穴の底、〝シルヴァメタル〟と呼ばれるエネルギー鉱石を採掘する鉱山の奥深く。その中を、つるはしで硬い岩を砕く音が響いてゆく。

そうかと思えば採掘用の大型機械が岩を砕く轟音（ごうおん）が響き渡り、それにより飛び散った土砂や岩のかけらを鉱夫たちが拾い上げ電動式の土砂用引き上げ機に積み上げていく。

働く人々は皆一様に汚れた服で疲れ切った顔をし、目に生気もない。

それも当然であろう、ここのところはノルマがなかなか達成できず、彼らは随分と長い時間残業をさせられているのだから。

「……貴様ら、なにをちんたらやっている！　これじゃ一生ノルマが達成できんぞ！　このまま一晩ここに泊まるつもりか!?」

穴ぐらの中に、現場監督の怒声が響き渡る。その声量に、屈強な鉱夫たちが身を竦（すく）ませた。

「そこの貴様！　さっきからペースが遅すぎる！　貴様のせいで全体が遅れている、どう責任をとるつもりだ！」

そのまま、目の前にいた鉱夫の背を手に持った警棒で殴りつける。ひっ、と悲鳴を上げてその鉱夫は倒れた。

「すっ、すいません……。けど、もう疲れちゃって……。きゅ、休憩を……」

「休憩だと!?　貴様、女神様のお慈悲である〝労働支援カード〟を使っていながらなんとなさけない事を！　どうやら、根性が足りんようだな……俺が鍛えてやる！」

「ひいっ、すいません、すいません……！」

そう言うと、現場監督は警棒で鉱夫を滅多（めった）打ちにし始めた。鉱夫はカメのような格好で何度も何度も謝罪するが現場監督はやめようとしない。

その様子を遠巻きに見ながら、他の鉱夫たちは自分たちがそれに巻き込まれないようにとどうにか作業を頑張っているフリに努める。

その間にも、なかなかノルマが達成できないことに苛立（いらだ）った他の現場監督たちが罵声を飛ばす。鉱山労働、とりわけこの鉱山において鉱夫たちの労働環境は劣悪と言っていい。

「はー……苦しいっす……。まぁだ終業時間になんないんすかねぇ……?」

鉱夫の一人、やや出っ歯気味の、ネズミを思わせる男が土砂の詰まった袋を引き上げ機の上に放り投げ、ため息とともに愚痴を吐いた。

「もうちょっとだろ……ほら、手を休めるなよ。見つかるとお前もボコボコにされるぞ」

隣の鉱夫が同じように袋を積み込みながら、滝のような汗を手ぬぐいで拭きつつ答える。

だがその手ぬぐいはすでに真っ黒で、拭くことにそれほどの意味があるようには見えない。

「そっすねー……。はあ、来る日も来る日もこんな山んなかの穴ぐらで痛めつけられながら石掘りなんてたまんねえっすよ。一生、こうなんすかねぇ～……。あー鉱夫の息子になんて生まれるんじゃなかったぁ」

「まったくだぜ、もっとまともな職業の親のところに生まれてりゃ〝労働支援カード〟ももっといいのを引き継げたのによぉ……。くそっ、世の中不公平だ！」

手ぬぐいの方がそう吐き捨てて、また土砂の袋を引き上げ機の上に放り投げた。

はあー、と二人同時にため息を吐いたところで、彼らのそばにいた、中年と言っていい皺だらけの顔をした男が慰めるように声を掛ける。

「ま、まあまあ君たち……。嫌なことばかりじゃないだろう？　終わったら、ちゃんとお楽しみもあるじゃないか。ねっ？　もうちょっと頑張ろうよ。ねっ？」

そう言って、ポチポチとボタンを押す仕草をしてみせる。それを見た二人は、顔を向けあった後にたりと笑ってみせた。

「あっ、そうっすね！　今日も楽しみっすねえ～、〝アレ〟！　今日はついてるといいなあ！　俺、朝のメイア様占いで四位だったんすよ！　なんかいいことありそうっす！　大当たり引いたりして！」

「アハハ、ないない！　確率何億分の一だと思ってんだよ！　そんなしょぼい順位で引けりゃ苦労無いっての！」

アハハ、と汚れて疲れ切った顔にその時だけは明るい笑顔が灯る。

そんな彼らの談笑を、その直ぐ側で体格のいい男がつるはしを何度も壁に叩きつけながら聞くとはなしに聞いていた。

ヒナト人としてはやや大柄の体に猫背気味、盛り上がった筋肉は他の鉱夫にも負けていないが、顔つきや動作には少し覇気が足りない。ヒナト人の多くがそうであるように黒い髪と黒い目をしており、その髪を〝邪魔にならなければそれでいい〟と言わんばかりに適当に揃えてある。

顔立ちはちゃんとすれば、もしかしたら整っていると思われるような雰囲気を持ってはいたが、妙に仏頂面をしており、そのせいで少し怖そうな印象を受ける。

流石にその顔にも疲労の色があったが、隣の男たちのように作業の手を止めるようなことはしようとせず、ただ黙々と時間の終わりを目指して作業だけを続けている。つまり、そういう男なのであった。

「そんなことないっすよ、四位は立派なもんす！　メイア様も四位すごーいっ！って言ってたし！　あー、俄然やりたくなってきた、いい加減終わって……」

そこまでネズミが喋ったところで、坑道中にけたましいサイレンの音が鳴り響いた。

それを確認すると、作業の指示を出していた現場監督の一人が声を上げる。
「よし、作業終わり！　貴様らのせいで随分と遅れたぞ、明日はもっとちゃんと働け！　総員、キリのいいところまで作業を終え道具を片付けた後に上がれ！　あと、今日の分のチケットを受け取ることを忘れないように！」
「やったぁ！　やっと終わったっすよー！」
ネズミが道具を放り出し、喝采を上げる。
周囲の鉱夫たちも息を吹き返したかのように喝采を上げると、一斉に元気づき出口に向かって殺到し始めた。
「おー、終わった終わった！　よっしゃあ、急げ！　急がねえと、あっという間に行列ができちまうぞ！　出遅れるな、走れ走れー！」
そう鉱夫の一人、豚面（ぶたづら）の男が叫んで駆けていく。
「おう、そうだな！　待つのは時間の無駄だし、万が一、先に当たりでも引かれたら悔しくて今夜は寝れねえぞ！　急げ、急げ！」
「こら！　いつも言っているが、坑道内は駆け足禁止だ！　他人を無理に追い越す行為も禁止！　守らない奴（やつ）には、罰を下すぞ！　おい、聞いているのか……！」
監督官が怒声を上げるが、もう誰も聞いてはいない。
すでに彼らの心は仕事の後のご褒美でいっぱいだ。

「あーもう、皆また道具を放り出したままで行っちゃって……。また朝礼で怒られるぞ、しょうがないなあ……」
先程ネズミたちを励ましていた中年の男がそう言いながら道具を拾い上げる。
だが、突如としてその腰からグキリと嫌な音がして、激痛が走り男は悲鳴を上げた。
「あいたあっ！　ぐうっ……こっ、腰がっ……。み、みんな、待ってくれえっ……」
助けを求めるが、鉱夫たちも現場監督もすでに引き上げてしまっていて見当たらない。
「おっ……置いてかないでぇ……！」
座ることもできず、どうしたものかと一人苦しんでいると、突如として横合いから手が伸びてきて彼を支えてくれた。
「……大丈夫ですか」
「えっ……。あ、君は……」
それは先程まで、側（そば）で寡黙につるはしを握っていた背の高い男であった。
「すっ、すまない……。助かった、実は腰をやってしまったようでね……。わ、悪いんだが出口まで手を貸してくれないか……」
「ええ、構いません。さ、楽な姿勢になって」
「ああ、良かった……！　すまない、すまないねえ……！　くう～、僕ももう歳（とし）だなあ、腰を悪くするなんて……。迷惑かけて、ごめんねぇ……！」

「気にしないでください。困った時はお互い様なので」
その肩に掴まりながら何度も謝罪する中年の男に、大柄な彼は感情の薄い返事をした。
助けてやっているといった恩着せがましさも、やれやれめんどくさいなといった嫌悪感も感じさせないその態度は、このような時は逆にありがたい。
「いやあ、みっともないとこ見せちゃって……。えっと……。君は、確か……高槻……高槻……」
「……アキトです。高槻アキト」
下の名前が出てこないらしい中年の男にそう答える。
高槻アキト。それが彼の名前だった。
「そうそう、アキト君。……いやあ、君はいつも無口に一人で作業してるから人間嫌いなのかと思ってたけど……優しいんだねえ。もっと早く声をかければよかったなあ」
「優しくなくても、これぐらいのことは普通にしますよ。……無口なのは、俺、口下手なんで人と話すのが苦手なだけです」
腰を庇った情けない姿勢でひょこひょこ歩きながら話しかけてくる男に、アキトはそう返す。
「そうかいそうかい。いやあ、皆あっという間に行っちゃったから、危うくこの鉱山で一晩苦しむことになるところだったよ。ほんと、ありがとねえ」

「何回も、お礼を言わなくていいです。……みんな、薄情ですね」
男の気持ちを考えてそう答えたアキトにくすりと微笑みを返すと、男は続ける。
「いやあ、しょうがないよ。こんな生活してると、楽しみはアレと食事ぐらいになっちゃうしねえ。それに、最近、ほら。かなり、残りが少なくなってるでしょ？　皆、口には出さないけどちょっと期待してるんだと思うよ」
「そうですね。でも、残りが少ないから当たるってもんでもないと思いますけどね」
男の言葉に、アキトは抑揚のない声で返事をした。言葉からは、それに対する興味があまり感じられない。
「いやあ、それでもねえ……もしかしたら、って気持ちは持っちゃうよ。だって、こんな生活から抜け出せる数少ないチャンスじゃない？　まあ、僕は運がまるでないんで、諦めてるんだけどね……。お、やっと昇降機だ。ありがとう、腰の調子もましになった、どうにか後は行けそうだ」
そう言うと男は地上に続く昇降機の手すりに掴まり、アキトも乗り込んだことを確認した後に地上行きのボタンを押す。精錬されたエネルギー鉱石から送られる電力で稼働する昇降機が、男二人を乗せて力強く上昇を始めた。
「……運は、誰でも平等ですよって言いたいですけど。……世の中には、確実に運の良い人と悪い人っていますからね……」

昇降機に揺られながら、アキトが呟く。その声には、今までにはない実感のようなものがこめられていた。

やがて昇降機は地上階にたどり着き、そこから坑道の外に出て、二人は実に十数時間ぶりに外の空気を吸いこんだ。

「ふううー、やれやれ……やっぱ外の空気は美味しいねえ……！　いや、本当にありがとう、アキト君。凄く助かったよ。僕の名前は鈴木っていうんだ。よろしくね」

「……ああ、ええ。どうも」

その鈴木と名乗った男が差し出した手をアキトが握ろうとした瞬間、怒声が飛び込んできた。

「遅いぞ、貴様ら！　片付けが終わったら迅速に戻らんか！　貴様らはチケットが欲しくないのか!?」

驚いて振り向くと、そこには名簿を手に持ちこちらを睨んでいるチケットの配布係が立っていた。

「ひっ……!?　あっ……す、すいません！　ちょっ、ちょっと腰を悪くしちゃってて……この人は、僕を助けてくれただけなんです！　ごめんなさい！　ぼ、僕はなしでもいいのでこの人には渡してあげてください、お願いします！」

「……」

鈴木が、痛む腰を抑えながらペコペコと配布係に頭を下げる。それをアキトは無表情に眺めていた。

「ふんっ、本当はやりたくないところだが、チケットの配布は業務への定められた報酬だ。仕方ないから、特別にくれてやる。今後はもっと早く戻るように！　ほら！」

そういうと、配布係は二人分、計六枚の〝チケット〟を放り投げてよこした。

鈴木はなおもペコペコと頭を下げながら、地面に落ちたそれを慌てて拾う。

「すっ、すいません、すいません……ありがとうございます、ありがとうございます……！」

拝むように頭を下げると、鈴木は振り返ってその半分をアキトに手渡した。

「さあ、アキト君、今日の分だ。……お互い、幸運がありますように」

「……どうも」

無表情のままアキトはそれを受け取る。配布係はふんっと鼻を鳴らして鉱夫用の宿舎がある方角を指さした。

「ほら、どうせすぐに引くんだろう？　さっさと行っちまえ！　その〝重労働ガチャチケット〟に願掛けでもして、夢を見ながら意気揚々とな！」

「はっ、はい、そうさせてもらいます！　ありがとうございます、ありがとうございます！」

ぺこぺこと頭を下げながらそちらに向かう鈴木をいつでも支えられるようにしながら、アキトもそれに続く。

やがて宿舎が近づいてくると、鈴木がニコリと笑って言った。
「はー……良かった良かった。どうにかこうにか、チケット貰えたねえ。この、三枚のチケットだけが毎日の潤いだからねえ……。貰えてよかったねえ、ねえ、アキトくん？」
「……別に、そんなペコペコする必要はないですよ。偉そうにしてますが、別にあいつがチケットをくれてるわけじゃないでしょう」
そういうと、手の中のチケットをひらひらと振って見せる。
「これは全部、〝女神様〟が労働のご褒美として俺たちに配ってくれているもの。あの人はそれを手渡してるだけに過ぎません。ただの仕事でしょう、あっちも」
「いやあ、そうは言っても僕のせいで待たせちゃったのは事実だし。あの人も早く上がりたいだろうに、手間を掛けちゃったしね。それに、彼が働いてるからこうしてチケットが手元に来るんだし、やっぱ感謝は忘れないようにしないとねぇ……」
棘のあることを言うアキトに鈴木は少し困った顔で答える。
……この人は、人が良すぎる。アキトは、そう思った。
「それで、アキト君はチケットはいつもどうしてるんだい？　すぐ使う派かな、それとも貯める派かい？」
「一日一枚は使って、二枚は貯めてます」
「へえ、そりゃ偉い！　大体みんな我慢できなくてその日に使っちまうか、貯めても一枚

なのに。大したもんだ」
話を変えるためだろう、そう聞いてきた鈴木にアキトは素直に答える。
学校を出て労働者として働くようになってから、それはアキトが続けてきた習慣の一つだった。
寮の玄関扉をくぐり、腰を痛めないように靴を履き替えながら鈴木が更に続ける。
「でも一枚は引くんだろう？　なら今からプレイルームに一緒に行くかい。そろそろ人も引いている頃だろうし」
「……そうですね。行きましょうか」
少しの思案の後、そう答える。正直に言えばそろそろ一人になりたいのだが、鈴木のこの朗らかさにはアキトとしても感じるものがあった。
ほんの一枚チケットを使う時間ぐらい、付き合っても構うまい。
「よしきた、さて当たりはどうなったかな……」
と鈴木が呟いて、入り口すぐそこのプレイルームを覗き込んだとたん、その中から大きな歓声が飛び出してきた。
「うおおおおっ！　すげえええええ！　当てやがったぜこいつっ！」
「うっ、羨ましいっ……俺が欲しかったのにー！」
「……うわっ、何事だいこりゃ……」

驚いて見てみると、プレイルームの中にはまだ数十人の鉱夫たちが詰め寄せており、なにやら大声で盛り上がっている。

不審そうな声をあげた鈴木（すずき）にアキトが言葉を返した。

「……まだこんなに人が残ってるなんて珍しい。どうやら、誰かがそれなりの当たりを引いたみたいですね」

「えっ、ほんとかい、どれどれ……」

二人してプレイルームの奥の方を覗（のぞ）き込むと、騒ぎの中心には、先程のネズミを思わせる男が興奮冷めやらぬという表情で立っていた。

掲げられたその手には、四角いカードが握られている。

「あははっ！　やっぱついてたっすねー！　これが占い四位の力っすよ！　どうっすか、羨ましいでしょー！　あー俺ってなんてツイてるやつなんすかねえー！　あはははは！」

「お、おい、それでそいつはどうするんだ？　ここで使っちまうのか、それとも売るのかよ？　も、もし売るなら俺がそれなりの値段でだな……」

見せびらかすようにそれを掲げるネズミに、先程の手ぬぐいが問いかける。

ネズミはニヤリと笑うと、カードを覗き込みながら、

「もちろん使うに決まってんじゃないですかっ……じゃあ行きますよ、出しますよー！」

と答え、周りを見回した後、叫んだ。

「……〝コール〟！」

途端、そのカードが輝きを放ち、そこから白い煙のようなものが吹き出す。鉱夫たちがおおっと歓声を上げ、やがてそれが収まると……そこには、ネズミにしなだれかかるようにして、きわどい衣装の美女が立っていた。

「……はぁーい、旦那様♡　出してくれて、あ・り・が・と♡　これから期限終了まで、いーっぱいサービスしちゃうから可愛がってねぇ……んちゅっ♡」

「おほおおおおおおお!!」

踊り子のような衣装を身に纏ったそれが、甘い声と共にネズミの頬に口づけをする。

ネズミはたまらず奇声を上げ、周囲からは羨ましがるようなため息が漏れた。

「〝シチュエーションカード〟【踊り子との愛と喧騒の日々】か……さすがランクSRのシチュエーションカードだ、出てくる女もマブいぜちくしょう！」

「ああー、くそ、いいおっぱいしてやがる……。あんなネズミ野郎にはもったいないぜ！ちくしょう、ガチャってのは不公平だ！」

などと盛り上がっている鉱夫たちから少し離れた位置で、鈴木が呟いた。

「ランクSRを引いたのか！　たいしたもんだ、ありゃ滅多にお目にかかれないぞ」

「ええ、SRのシチュエーションカードを引いたみたいですね。なるほど、そりゃ盛り上がる」

納得した様子の鈴木にアキトが返す。その視線の先には、プレイルームの奥に設置された四角い箱のような機械があった。

ネズミたちが熱狂しているそれは、女神が人のために設置した〝ガチャ〟と呼ばれる装置だ。その装置に労働の対価として得られるチケットを投入することで、多数の魅力的な品を手に入れることができる仕組みなのである。

その中に込められた品はまずカードの形で排出される。

その中身は食料や貴金属など即物的なものから、人の身ではどういう仕組みなのかすら理解できない超常現象を引き起こす宝まで様々であり、ネズミが手に入れたシチュエーションカードとは、そのガチャから排出されるカードの一種類である。

手に入れたカードは、その持ち主が定められた解放の言葉〝コール〟を唱えることで、中身を実物化させることが可能だ。そしてそれがシチュエーションカードのような人物系カードである場合は、中から人物が飛び出して、その期限終了まで様々なことをしてくれるのである。

たとえば専属料理人として毎日料理を振る舞ってくれたり、メイドとして尽くしてくれたり、さらには架空の幼馴染みとして日々を過ごしてくれたり。

このようにシチュエーションカードには様々な種類があるが、おそらくネズミが手に入れたあれはその中でも恋人系のもの、すなわち期限が切れるまでの間、幻想の恋人が付き

合ってくれるという類のものであると思われる。
「やあ、いいなあ……実に美人じゃないか。僕も異性にはとんと縁がないからな、引けたら嬉しいところなんだけどねえ。……アキトくんも好きだろ？　シチュエーションカード」
「……そうですね」
問うてくる鈴木に生返事を返す。正直に言うと、アキトはシチュエーションカードがあまり好きではなかった。
なぜならば、あれは自分の意志を持たないただの現象に過ぎないからだ。
声をかければ返事をするし、それらしい受け答えもするが、基本的にはただの幻想でしかない。使用者が「止まれ」と命じれば完全に動きを止めるし、「消えていろ」と言えば忽然と姿を消してしまう。
それがいい、と言う人も多いがアキトにはそれが不満だった。
……そうだ。俺が手にしたいのはああいう便利なだけの道具ではない。俺が手にしたいのは、もっと……。
「あっ!?　おい、なんだよ、今頃来たのかよ、ずっと探してたんだぞ！　おい鈴木さん、あんた、たしかチケット貯めてたよな!?　なっ！　それ、俺に売ってくれよ、頼むよ！」
「わっ!?」
突如として横合いから豚面の鉱夫が詰め寄ってきて、鈴木に懇願を始める。

驚いた鈴木は悲鳴を上げたが、そんなことはお構いなしに豚面が続けた。
「なあ、今、何枚持ってる!?　なあ教えてくれよ、ベッドの下に溜め込んでるの知ってるんだぜ！　なあ、何枚あるんだ、なあ！」
「えっ、ひゃ、百枚ちょっとだけど……。どうして急にそんな……」
「それ、全部売ってくれ！　相場の1・2倍で買うから！　なっ、いいだろ！　ほら、金！」
動揺する鈴木の眼前に豚面が金を突きつける。そこには１００００GPと書かれたヨレヨレの紙幣が束になっており、それなりの量があった。
「えっ、待ってよ、1・2倍とか言われても……。急にそんな事言われてもわからな……」
「理由は、後で説明する！　時間がないんだよ！　いいから、早く持ってきてくれ！　俺の人生がかかってるんだ！　早く……ッ！」
「あっ、ちょっと何勝手に交渉してんすか！　ぼ、僕も鈴木さんに頼むつもりだったっす！　す、鈴木さん！　俺に、〝重労働ガチャチケット〟売ってくれっす！　頼むっす！」
豚面に続いて、先程まで輪の中心で得意げな顔をしていたネズミが飛び込んできた。
つい今しがたまで彼にしなだれかかっていた踊り子の姿はどこにも見えない。おそらく一時的に消したのだろう。
「今、絶好調なんスよ！　今引けばまた良いのが来るっす！　金は出します、だから早くチケットをよこしやがってください、さあはやく！」

「ま、待ってよ君たち、なにがなんだかっ……。なんで君たち、そんなにチケットを欲しがって……！」

腰の痛みを抱えながら二人に詰め寄られて、鈴木は困りきった顔をしている。

それを見かねたアキトが助け舟を出した。

「……理由がわかりましたよ、鈴木さん。あれを見てください」

「え、あれって……？」

アキトが指差すその先には、ガチャにはめ込まれた表示パネルがあった。

四角い、人の背丈ほどもあるそのガチャの箱には、チケットを挿入するスリットとガチャを引くためのボタン、そして賞品であるカードの排出口の他に表示パネルがついており、そこにはこのガチャ、いわゆる〝重労働ガチャ〟の中にまだ残っている当たりが表示されている。

そしてそこには、確かに今期のガチャの目玉、世界中の人々の希望、神の世界への通行パス……〝ゴットカード〟の残数1が確かに表示されていたのだ。

「……ああ、大当たりのゴットカードがまだ出ていないのか。皆が熱狂するわけだ。だが、それは昨日までだって同じなんじゃ……」

「問題は、ガチャの残数です。見てください」

「え、どれどれ……」

鈴木が目を凝らしてガチャの画面を見つめる。

するとそこには、残っている当たりの下に残数295082という数字が表示されていた。

「……残り、29万5000と少しだって!?　昨日まではもっとたくさんあったのに！どういうことだ、こりゃあ……！」

「おそらく、世界中の人々がチャンスと見て保有しているチケットをぶっ放してるんでしょう。そしてそれでもゴットカードがまだ出ていない……。つまり」

「そういうこった。こいつはゴットカードを引く大チャンスってわけさ、お二人さん」

突如として彼らの後ろから、アキトの言葉を引き継ぐように言葉がかけられた。

二人が驚いて振り向くと、そこには切れ長の涼しげな目をした男が立っていた。

「さっ、指田くんか。凄いな、こりゃ。僕も重労働ガチャを引いて長いが、こんな残数までゴットカードが残ってるなんて見たことがないよ」

「俺も初めてですよ。大体気がついたときにはどっかで出ちまって、この宿舎からはゴットカードどころかランクURすら出たことがありませんからね」

指田と呼ばれた同僚の鉱夫が答える。

鉱夫としては痩せ型の、それなりに整った顔立ちをした男だ。鉱夫などよりもっと華やかな仕事のほうが向いてそうな外見をしている。

アキトはこの男を知っていたが、名前までは覚えていなかった。アキトは、あまり周囲の人間に興味がない。

「残数が残数なんで、結構な人数が賭けに出てるんだろうな、さっきから異常な速度で数が減ってきてやがる。だがそれでも当たりがでないとなりゃあ、さらにその尻馬に乗りたがるやつも出てくる。そのせいでさらに加速して、今じゃ残数もこの有様さ。今頃、世界中の重労働者たちが必死な顔でガチャを回してるだろうぜ」

指田はそう言うと、おどけた様子で両手を開く仕草をしてみせる。

「なるほど。最初は残量１０００億からスタートする重労働ガチャの大当たりが、わずか２９万５０００になるまで残っているなんて一種の異常事態。世界中で引いているとなればこの程度の量はあっという間……。もう一時間もかからない。皆が慌てるわけだ」

言葉のわりに冷めた調子でアキトが呟く。

重労働ガチャ、とは女神が人類への贈り物として用意したガチャの一種である。

〝労働ガチャ〟と呼ばれる種類のガチャで、仕事を終えた人々は企業からの給料の他に、女神から送られてくるガチャチケットを得ることが出来る。

そしてそのチケットをガチャに投入しボタンを押せば、その場で抽選が行われ、女神の世界と繋がっているガチャからカードが排出されるのである。

ただ、このガチャは単体で稼働しているわけではない。重労働ガチャと呼ばれるガチャ

は世界中に存在し、そのすべてで当たりが共有されている。つまり、このガチャの中身を世界中の重労働者たちで奪い合っているわけである。

まさしく今、世界のどこかで、アキトたちと同じような労働者が全財産を溶かす勢いで抽選に挑んでいるというわけだ。

「た、たしかに凄い……。こんなチャンス滅多にないぞっ……」

「そういうわけっす、だから早くチケットを売ってくださいっす！　相場の二倍出すっす、それでいいでしょ、ねっねっ！」

「あっ、待てよ、俺が先に交渉してたんだぞ！　じゃあしょうがない、三倍でいい！　頼む売ってくれ、今しかないんだ！　頼む！」

「あっ、おい、あんたチケット持ってるのか!?　なら俺に売ってくれよ、自分の分はもう使っちまったんだ！　良いだろ、なあ！」

驚く鈴木にネズミと豚面が更に詰め寄る。それに気づいた他の鉱夫たちも後に続く。プレイルームの中は、ちょっとしたパニックになりつつあった。だがそれも仕方がないだろう。これはこの鉱山の劣悪な労働環境から脱出できる数少ないチャンスなのだ。

言ってみれば天から垂らされた蜘蛛の糸。そしてその先には、見目麗しい女神たちが微笑んでいるのだ。日々奴隷のように扱われる鉱夫が彼女たちと同じ世界に住めるなど、まさに夢のような話と言うより他ない。

「やれやれ、どいつも必死だな。鈴木さん困ってんじゃねえか。しょうがねえ」
「あなたは、売ってくれと言わないので？」
壁にもたれかかったまま呆れた調子で言う指田にアキトが尋ねる。指田はまた芝居がかった動作で手を広げてみせると、皮肉のこもった声を返した。
「俺？　俺はやらねえよ。こんなもの、一時の熱狂でしかねえ。こんなものに釣られて財産を持ち出すなんて馬鹿のやることさ」
「そういうもんですか」
「ああ。それにな、残量がいくらだろうが勢い任せの運だよりってのは俺のやり方じゃない。しかけるなら、相応の準備をしてからだ。俺はすでにチケットの転売でそこそこ儲けた。今はコレで十分さ」
「なるほど」
チケットは基本的に個人の持ち物であり、他人に譲渡することは禁止とされている。だがそれは建前上のことであり、実際譲渡したからといって罰則があるわけではない。
よほど大規模に、それこそ万単位で集めるような者が出てくればおそらく問題となるだろうが、個人間で１００枚単位が移動したぐらいでは誰も気にもしない。
そして、そのチケット一枚が取り引きされる相場は、平常時ならば、この世界の共通貨幣である〝ＧＰ〟でせいぜい数百ＧＰ前後。食事一回分程度の金額だ。

労働ガチャは当たりこそ強烈なものの、普通の排出品は食料や日用品が多く、そこまで豪華でもない。回すより金にしたほうが得だと考える者は、他者と交換してもらっているのである。
だが、今のような状態ならばそれがその何倍でも売れる。だから、チケットを貯めていた者はそれを売って金に変え、後日値段が戻れば改めて買い集めればたったそれだけで利益が発生するというわけだ。
月給が20万ＧＰと少し程度の彼らにとって、その金額は決して馬鹿にできない。
「おい、何やってんだ、早くしろよ！　時間との勝負なんだぞ、ほんとにグズだなオッサン！」
「そうっすよ、素直に持ってくりゃいいんスよ！　アンタが儲けるチャンスなんてそうそうないでしょう！　買ってやるっつってんだ、早くしろノロマ！」
「そうだ、売～れ、売～れ！」
「ひいっ……ど、どうしよう、指田くん、アキトくん！　うっ、売ったほうが良いのかなっ……」
やがて売れの大合唱が始まり、耐えきれなくなった鈴木が、助けを求めるように冷静な二人を振り返る。
「さあ……。ま、余計なお世話ですけど、売ったほうが良いんじゃないですか？　ガチャ

に自信があるなら回すのも手ですけど……俺なら売りますね」
そっぽを向きながら指田が答え、なおも続ける。
「ゴットカードなんていう幻想より目の前の金ってね。当たりゃデカいかもしれないが、確実な金ってのも良いもんだ。ま、最終的に決めるのは鈴木さんですがね」
「な、なるほど……。……アキトくんもそう思うかい？　ぼっ、僕、自分じゃ決められないんだ……後押ししてくれないかっ……」
媚びるような表情で鈴木が問うてくる。アキトは少し思案顔をした後、その目を見つめながら落ち着いた声で返した。
「……それは、鈴木さんが決めることです。鈴木さんにとってチケットがお金に変えても良いものならそうすべきだし、今、回したいなら自分でやるべきかと」
「えっ……」
「鈴木さん、さっき言ってましたよね。運が悪いから当たりは諦めてるって。でも、今まで話したことがなかったですが、鈴木さんがガチャを楽しそうに回してるところは何回か見たことあります」
静かな声で続けるアキトの言葉を、鈴木も神妙な顔で聞いている。普段あまり喋らないせいで長い言葉を紡ぐことに苦心しながらも、アキトは続けた。
「ガチャ、好きなんでしょう？　わかりますよ。けど今それを売って、そのお金で他の楽

しみを買いたいならそれでいいと思います。それもありです。……けど、もし今自分でガチャを引きたいとちょっとでも思ってるなら……」
ちらり、と横の指田に目を向ける。
彼はただ無表情に二人を見つめていた。
「……回せばいいと思います。他人なんて関係ない。それはあなたの物なんだ。どうするかは自分で決めればいい」
「……アキト君……」
鈴木が感動した面持ちでアキトを見つめる。柄にも無いことを言ってしまい、アキトは少し照れて顔を背けた。
とはいえ周りからその表情の変化は読み取れず、元通りの仏頂面にしか見えないのだが。
「おい、オッサンいい加減にしろっす、もう残数が25万切りそうっすよ！　もうこの瞬間にも出そう！　早くしろ、いい加減ぶんなぐ……」
「……ごめん、皆。僕のチケットは自分で使うよ。面白いじゃないか、今こそ貯めていたチケットを放り込むときかもしれない」
えっ、と周囲の鉱夫たちが驚きの声を上げる。鈴木が気の弱い男なのは見ればわかるし、このような時に勝負をかけるような人間にはとても思えなかったからだ。
「あっ、あんた、ランクRすら滅多に当てられない屑運じゃないかっ……挑戦したってチ

ケットを無駄にするだけだろ！　なんでそんなっ……」
「ごめんね。でも、こういうときのための蓄えだから。……じゃあ、チケットを取ってくるよ」
なおも食い下がる豚面にはっきりと答え、鈴木が歩きだす。こう言われては、もう誰も何も言えない。
皆が見守る中、よたよたと部屋に向かう途中で、鈴木がアキトの方を向き直って尋ねた。
「……君はやらないのかい？　アキト君。君も貯めてるんじゃなかったかい。一緒に回さないか。なんなら、人に売るのでも……」
「いえ、俺は、今は回す気がありません。それに、鈴木さんと違っていつも一人なんで、後々軋轢を生みそうなチケット売りもする気はないです。難癖つけられると弱い立場なんでね」
「そうかい、わかったよ。……じゃあ、ちょっと失礼」
そう言うと、鈴木は行ってしまった。それを見送ると、周りの連中は面白がって口々に好き勝手なことを言い出す。
「あの冴えないオッサンがゴットカードに挑戦かぁ。面白くなってきやがった！　酒取ってこよ、酒の肴にもってこいだぜ！」
「あんなやつが当たり引けるわけがないんだよなあ……！　なぁんで占い四位の俺に任せ

ないっすかねえー！　ほんとつっかえないなあ！　おっさんは！」
そうしているうちに、ガチャのカード残数はガンガン減っていき、やがてわずか20万ほどになってしまった。それでもゴットカードの残数1はいまだに消えない。
間に合わないのではないか、というぐらいの時間をかけ、鉱夫たちがすっかり焦れた頃に、ようやく鈴木が姿を見せた。
「お、おまたせ、また腰が痛くなって手間取っちゃったよ……全部で121枚あった。これで挑戦させてもらうよ」
「おおっ、いいぞ、いけいけえー！」
わっと歓声が上がり、鉱夫たちがガチャまでの道を空ける。
様々な思惑が入り乱れた視線を浴びながら、鈴木がガチャの席につく。
「さて……じゃあ、いかせてもらいます。……女神様のお恵みであるガチャ、不肖鈴木、今日も引かせていただきます」
恭しくガチャに一礼をする鈴木。彼は女神を敬愛する者の一人として、その奇跡の表れであるガチャにも敬意を持っていた。
女神信徒たちにとって、ガチャは祭壇や神殿のようなものにあたる。
「ふんっ、あんたにゴットカードなんて引けるもんか！　とっととスっちまえ、おっさん！」
「そうっすよ、俺達をないがしろにしやがって！　女神様、そいつに天罰食らわせてくだ

さいっす！」

チケットを奪いそこねた二人が罵声を浴びせる。いくらなんでもひどいその内容に、アキトはわずかに眉をひそめた。

だが当の鈴木はそれを気にはしていない。

（君たちの言うとおりだ、僕にそんな大それた当たりは引けやしない……。ちょっとした当たりが出れば十分さ。だが……）

ウィイン、と音を立てながらチケットがガチャに飲み込まれていく。これが即座に神の世界に送られているというのだから不思議な話だ。女神たちの力は、人間の理解を遥かに越えている。

（……この、ガチャを引く瞬間というやつだけは……いくつになっても、良いものだ）

ランプが点灯し、ガチャが引ける状態になった。もうガチャの残量は16万ほどになってしまっている。鈴木は特に力む様子もなく、笑顔でボタンを押した。即座にガチャの中から、低い駆動音が響いてくる。

――そして、その、瞬間。ガチャから、今まで聞いたこともないようなけたましいファンファーレの音が鳴り響いた。

「っ……!?」

「おおっ……」

驚く鈴木とどよめく鉱夫たち。ガチャはピカピカと狂ったように点滅を繰り返し、祝福の音色を鳴り響かせる。生まれて物心がついてから、今日までずっとガチャに慣れ親しんできた彼らだが、確かにそれは今まで目にしたことのない演出であった。

「えっ、お、おい……嘘だろ……？　ま、まさか……」

さすがに冷静ではいられなくなった指田が、その光景を見ながら呆然と声を上げる。アキトも驚いて言葉もない。

皆が呆気にとられている中、やがて演出は収まり、ウィイイインという音と共にガチャのカード排出口から光があふれ、やがてそれが飛び出してきた。

「……」

そっと、なにかひどく熱いものに触れるように鈴木がそれを手にする。

そして、それを覗き込んだまま動かなくなってしまった鈴木に、業を煮やした手ぬぐいが皆を代表するように尋ねた。

「……お、おい、鈴木さん……？　あ、あんた、まさか……？」

やがて、それを握りしめたままふるふると震えだした鈴木は、くるりと振り返ると、涙を流しながら、〝それ〟……己の手元に転がり込んできた、金色のカードを掲げて見せながら言った。

「あっ……当たりました……。大当たり……。〝ゴットカード〟……【幸運の女神の祝

福】……。……当たり、ましたぁ……！」

……そしてその言葉通り、そのカードには確かに、女神の一人〝幸運の女神〟メイア・スターズの絵とともにこう書かれていたのである。

【幸運の女神の祝福】
このカードを手にせし者、神の世界の一員となるであろう

「……うおおおおおおおおおおおお!!」

爆発するように歓声が上がる。年間の当選者、全世界で実にほんの数十人。

この世界最大の大当たりと言っていい神の世界への片道切符が、今、たしかにここに存在していた。

「うっ……嘘だ……っ。そん、な……っ。……おっ……俺が、当てるはずの……ゴットカードがっ……あんなっ……あんな、オッサンの手にっ……」

地面にへたりこんだ豚面が、呆然と呟く。

「あっ……ありえないっす……。占い四位の俺を差し置いて、あんなおっさんがっ……メイア様のカードがあんな薄汚いオッサンの手にっ……！　ありえない、ありえないっすよおお！」

ネズミが悲鳴のような声を上げる。祝福する者、怨嗟の声を上げる者、そしてそれに釣られてプレイルームに駆け込んでくる鉱夫たち。興奮して酒を撒き散らす者までおり、狭いプレイルームは一瞬で興奮のるつぼと化す。

「……嘘だろ、ありえねえ……っ。俺も……俺も、挑戦してりゃ当たってかもしれないってのかよ……！」

「……」

驚愕の表情で呟く指田。アキトもその光景を呆然と見つめていたが、やがて鈴木が戸惑った視線を自分に向けてきていることに気づくと、歩み寄り、言葉をかけた。

「……鈴木さん。おめでとうございます」

「っ……。……あ、ありがとう……ありがとうねえ、アキトくんっ……。君が、言ってくれたおかげだよ……っ。ありがとう……ありがとうねえ……！」

感極まった様子の鈴木がアキトの手を掴み、深々と頭を下げてその手を握りしめる。一方的な握手であり、鈴木のその手は緊張と興奮で驚くほどに汗で滑っていたが、アキトは嫌がらずその手を力強く握りしめた。

「さあ、鈴木さん。せっかく手に入れたんだ、コールしてはどうですか。皆興奮してます、あまり時間をかけると、その……あまり、良くないかもしれません」

アキトがそう言うと、はっと驚いた様子で鈴木が周囲を見回した。まさか神のカードを

奪い取ろうなどという不敬者はそうそういないだろうが、たしかに興奮している者たちがなにをしてくるかはわからない。

使うのならば、早いに越したことはないだろう。

「そうだ、早く見せろ！　女神様が本当に来るのか!?　この汚い宿舎に！　うおお、信じられねえ、もう我慢できねえよ早く出してくれ！」

「そうだそうだ、勿体つけるな！　やれねーなら俺が変わってやるぜオッサン！　急げ急げ！」

「そうだ、はやく！　ゴット！　ゴット！　ゴット！」

「ゴット！　ゴット！　ゴット！　ゴット！」

鉱夫たちが囃し立てる。

だらだらと汗を流しながら、鈴木はキョロキョロとあたりを見渡し、やがて自分が手にしたそれ……ゴットカードを愛おしそうに撫でた後、再び掲げてみせた。

「う、うん、そうだね……、じゃ、じゃあ……。ああ、緊張するなあ……じゃあ、いくよっ……〝コール〟！」

そして、解放の呪文〝コール〟を唱える。

その瞬間。カードからまばゆい虹色の光が放たれ、白い煙のようなものが周囲を覆った。

「おおおっ……」

鉱夫たちが驚き目を細める。やがて、それが収まったとき。

……彼らの前には、幾度となく画面越しに目にした、輝くばかりの女神が立っていた。

「……ヤッホー！　皆、〝幸運の女神〟メイア・スターズだよ☆　元気いいいいい!?」

「……元気いいいいいい!!」

そうして、現れた女神は満面の笑顔を浮かべ、びしりとポーズを取ってその場の全員に向けて叫んだ。それに釣られて鉱夫たちが叫びを返す。

それは、まさしくこの世の者とは思えないほどの美しさであった。

輝くような……いいや、実際に輝きを放つ亜麻色の髪。それは後頭部で二つの団子状にくくられており、そこから二つに分かれ腰のあたりまで美しいラインを描いている。見本のように整った顔には、数多の宝石をちりばめたかのようなくりくりとした金色の瞳とみずみずしい果実のような紅い唇。全体としてほっそりとしているのに、ある意味アンバランスと言っていいほど豊かな胸。キラキラと輝く、可愛らしくもどこか神々しい服と共にその身にはいくつものアクセサリが輝きを放ち、その一つですら一人分の人生を楽に買えそうなほどの価値を窺わせる。

だが、それすらもくすむほどの美貌がその顔を彩り、そしてなにより飛び切りの笑顔がその魅力を何倍にも膨らませていた。

幸運の女神、メイア・スターズ。彼女は地上のどの女性より美しく、また画面越しに見

る彼女よりはるかに強力な魅力を放ち、確かに眼の前に存在していた。
「もー、皆なっかなかメイアのこと呼んでくれないから退屈しちゃったあ！　みんなぁ、愛が足りてないんじゃないのー!?」
「うおお、すいませんっした、女神様ぁあああ！　あああ、うっ、美しいい！　幸せええええ！」
　もはや自分をなくした鉱夫たちが涙を流しながら絶叫する。それに気を良くしたのか、女神メイアはくるくるとその場で回ってみせると、びしっと彼らを指差してポーズを決めた。
「まあオッケーオッケー！　じゃあ、せっかく来たんだから、一曲、歌わせてもらうね☆〝恋のゴールドラッシュ〟、いっくよー☆！」
　そして、彼女がパチリと指を鳴らした途端、アキト達はプレイルームが僅かに歪んだかのような感覚に囚われ、そして気づいた時にはそこはきらびやかなステージに様変わりしていた。
「うっ……うおおおお！　女神様の生歌だあああああ！」
　鉱夫たちが喉も嗄れよとばかりに叫ぶ。その視線を一身に浴び、やがて流れ出したBGMとともに、いつの間にか露出の激しい西部劇のガンマンのような衣装に装いを変えたメイア・スターズが舞台の上でその美声を響かせ始めた。

「……〝恋のゴールドラッシュ〟か。たしか、メイア・スターズが主演の、西部劇とかいうやつの主題歌だったか」
「ええ。人気作で、何十年も前から定番として〝ゴッド・ヴィジョン〟で何度も放送されているやつですね」
　まだ状況をうまく飲み込めないといった様子の指田が、呟くように言う。返事が欲しかったわけではないだろうが、目立つ位置から逃げるように下がってきたアキトがそれに答えた。
〝ゴッド・ヴィジョン〟とは女神たちがガチャ以外にもたらした奇跡の一つだ。
　四角い箱の中央に映像を映し出す画面がはめ込まれていて、そこには彼女たち女神が様々な情報を発信する〝番組〟と呼ばれる映像が常に流れている。その中から、彼女たちは時に人々に知恵を与え、時に情報を与え、そして何より娯楽を与える。
　演劇、教育、そして歌。人々は子供の頃より彼女たちが行うそれを見て育ち、やがてそれを見て死んでいく。現実で女神を目の当たりに出来る人間はほとんどいないが、彼女たちのことを人々は親よりもよく知っているのである。
　そして、この幸運の女神メイアは女神たちの中でも特に人気が高く、時として〝視聴率〟で彼女たちの主神である天津風ヒカルを凌ぐことすらあるのだ。
「……ふうっ。皆、ありがと～！　皆ノリノリで、メイア嬉しいー！」

やがて三分ちょっとのその曲は終わり、メイアがニコニコ笑顔でマイクを掲げる。
鉱夫たちはまたもや歓声を上げ、感動の涙を流す。まさか、自分の人生で女神の生歌を聞ける日が来るなど考えたこともなかったのである。
その光景を特等席で眺めながら、いまだ自分は夢を見ているのではないかと疑っている鈴木に歩み寄ると、メイアはおもむろにその手を握りしめて微笑んだ。
「こんにちは、あなたが今回の当選者さんね？　メイアを呼んでくれてありがとう！　とびきりの幸運が、あなたにありましたっ☆」
「えっ……は、はいっ……、ありとうございますっ……」
動揺し、鈴木は顔を赤らめた。鈴木にとってもメイアは子供の時から憧れていた女神の一人だ。その女神に手を握られ、しかも己の服は鉱山仕事の後でひどく汚れており、手には驚くほど汗をかいている。
その上、自分は長年の労働で疲れ果て、随分としわくちゃのおじさんになってしまっている。恥ずかしい、と思い、申し訳ないと思った。
早く手を離さないと気持ち悪いのではないか、と思ったが、メイアは嫌な顔ひとつせずぎゅっとその手を握りしめている。
「あ、あの……」
「うんうん、わかってるわかってる☆　当たった人がどんな事考えるかはぜ～んぶお見通

しだよ☆　メイアに全部任せてねっ」
どうしていいのかわからない、という様子の鈴木を覗き込み、笑顔でメイアが答える。
その手を握る彼女の手に更に力がこもり、さらにこう続けた。
「神の世界に住まう人々は、完全に幸福でなければいけない……。神の世界には、負い目も悩みもなぁんにもないんだよ。だから、まずは……あなたに、完全なる肉体と頭脳をあげるね☆」
「えっ……？」
「ゴッド☆ブレス☆ユー！」
ぞくり、と、何かを感じた鈴木の背筋に冷たいものが走る。だが、女神は相手の都合などお構いなしに祝福の言葉を投げかけた。
そして、次の瞬間、その手から何かが流れ込んだ。
「……うあああああああ!?」
驚いた鈴木が絶叫を上げる。その体は、女神の輝きが伝播したように光を放っていた。
「おっ、おいおい、なんだこりゃっ……。どうなってんだ!?」
鉱夫の一人が驚いて声を上げる。皆の視線に晒されながら、光り輝く鈴木はかがみ込み、助けを求めるようにアキトの方を見た。
「うあああっ……なんだっ……何かが、流れ込んでくるっ……！　怖いっ……怖いよ、ア

キトくんっ……！　助けて、助けてくれっ……アキッ……」
「……鈴木さっ……」
　驚いたアキトが手を伸ばす。だが、それが届くより早く鈴木の体はより強烈な光に包まれ、そしてそれが収まったときには。
　……元の鈴木の年老いた姿はなく、そこには、若く、細身で美しい少年が立っていた。
「……えええええー!?」
　鉱夫たちが驚きの声を上げる。それこそ、それは見たこともないような美少年であり、女神と立ち並んでいてもまるで違和感のない、言うなれば〝完全なる人の姿〟をしていたのだ。
　――ゴットカード。神の世界に行きたいという人間の願いを叶えるために女神たちが用意した祝福。それは、世の労働者階級たちを労うために、労働ガチャの大当たりに設定される。
　そのカードを当てたものは、完全なる存在となり、いずこかにある神の世界で幸福に永遠に生きつづけるのだという。
「……」
　その少年は、驚愕の表情で自分の体をペタペタと触っていたが、メイアがどこからともなく取り出した鏡を向けると、それをしげしげと見つめ始めた。

「はい、美少年☆　どう、素敵でしょう？　これで、外見のコンプレックスは吹き飛んだでしょ？」
「……こっ……これが、僕……？　……う……うつく、しい……」
　呆然と、その少年が呟く。さらりと流れる美しい黒髪。ひと目で恋に落ちてしまいそうな女性的ですらある相貌。体のあらゆる配分が芸術的に仕上がっており、世界中を探してもこのような少年は他にいないのではないかと思われた。
「お、おい、まさかあれ……あの鈴木のおっさんか……？」
「ひ、人の姿もあんな簡単に変えられちまうのか……。女神様、パネエー……」
　鉱夫たちがひそひそと言い合う。どうやら、あれは鈴木が姿を変えたものだとようやく理解が追いついてきたようだ。
　そして、動揺を隠せないでいた鈴木と思われる少年の表情は、やがて笑顔に染まっていった。ずっと嫌いだった情けない顔も、あたりの様子をうかがう臆病な表情も、もはやどこにも存在しない。
　誰が見ても美しいと感じるであろう美貌が、ここにあるのだ。そう、自分の顔に……！
「……鈴木さん……？」
「……ふっ……ふふふっ……凄いっ……凄いぞ！　これが、女神様のお力！　情けなさも、腰の痛みも、全部吹き飛んだ！　それどころか、全身に、感じたことすら無い活力を感じ

る！　凄いぞ、世界すら変えられそうだ！　これが、僕っ……これからは、これで生きていけるんだっ……永遠に！　あははっ……あはははははは！」

心配げに声をかけたアキトに返事もせず、鈴木が狂ったように喜びの声を上げる。

そこには、先程までの気弱なおじさんの気配は残っていなかった。

「……おいおい、本当に大丈夫なのかよ……。本当にこれ、鈴木のおっさんなのか？　変わり過ぎじゃねえか……」

「あー大丈夫大丈夫、本人の人格には一切手を触れてないよ。急に美貌や知恵を手に入れて興奮してるだけだからさ。ちょっとだけ見守ってあげてね☆」

呟いた指田の声を耳ざとく拾ったメイアが言う。やがて鈴木は落ち着きを取り戻し、メイアに向き合った。

「ありがとうございます、女神様。これよりない、素晴らしい贈り物だ……。おかげで、頭にかかっていたモヤが取れたようですよ。世界は、こんなに鮮明だったんですね……本当に、ありがとう」

「あはは、それみーんな同じことを言うんだよねえ。どういたしましてっ。おめでとう、新しい人生☆」

そう言って二人で笑い合う。その姿はまさしく、この薄汚れた宿舎から隔絶された絵画の如き美しさを湛えており、鉱夫たちは劣等感を覚えずにはいられなかった。

「……なっ、なんだよっ……ラッキーじいめっ、お前が当てれたのは俺がチケットを取らなかったからなんだからなっ……！　勘違いするなよ、この野郎！」

「そっ、そうだそうだ、本来なら占い四位のこの俺が当てるところだったんスよ！　なんなんすか、ちくしょう！　ちくしょう！　ちょっとは感謝するっすよ、おっさん！」

嫉妬したのだろう、豚面とネズミが美しく変貌した鈴木に吠える。だが、彼らのほうをチラリと見ると、鈴木は冷笑を浮かべ、ぞっとするような冷たい声で答えた。

「……黙れ。汚らわしい虫どもめ」

「なっ……」

鈴木のものとは思えないその言葉に、豚とネズミが驚愕の表情を浮かべる。

だがやがてその言葉の意味が心に浸透していき、豚面が真っ赤な顔をして言い返した。

「だっ、誰が虫だこの野郎っ……。とっ、取り消せよ、今の言葉っ……！　お、俺は虫じゃない！」

「虫だろうが。お前らが虫じゃなくてなんだって言うんだ？　カサカサと地面を這い回り、泥水を啜ることしかできない虫。醜い外見、理解を持たぬ知能、増えることしかできない無駄な命！　まさに虫だ！」

「なっ……」

「僕……いいや、俺もかつては同じ虫だった！　だが、今は違う！　俺は手に入れた！

虫ではない人生を手に入れたんだ！　俺は……俺は、虫から人へと生まれ変わることができたんだ！　あはは、あはははははっ！」

周りの鉱夫たちも、こちらを見下しきったその言葉に驚きの表情を浮かべる。これが本当にあの人の良かった鈴木なのだろうか。とても同じ人物とは思えない。

「あー……やっぱこうなっちゃうかぁ。ごめんねえ、みんなぁ。急に賢くなると、みんな気が大きくなっちゃって、こういう事を言いたくなっちゃうみたい。でも、今は混乱してるだけだからさ……だから大目に見てあげてね、ねっ、ねっ」

「え、ええ……。女神様がそうおっしゃるなら……」

女神メイアが申し訳なさそうに言う。動揺していた鉱夫たちも、メイアにそう言われては怒るわけにもいかず、しょうがないかという表情を浮かべて顔を見合わせた。

「……だからって変わり過ぎじゃねえか？　あの優しそうなおっさんの面影もねえぞ……」

「優しい？　違うな……前の俺は優しかったわけじゃない。何もかもが怖いから、優しいふりをして自分を守っていただけさ」

呆れた調子で言った指田に鈴木が答える。

「誰かに優しくしていれば、自分にも優しくしてくれるかもしれない……。無能で、役に立たないクズが唯一持ちえる特技がそれだっただけのこと。もう、俺には必要ない」

過去の自分を馬鹿にするように鈴木が吐き捨てる。その光景を、アキトはやはり表情の

ない顔で見つめていた。

「さあ……もういいでしょう。俺をこのゴミ溜めから、人間のいるべき世界に連れて行ってください、女神様。俺は、早く幸福な人生を始めたい」

「はーい。でも、もう本当に仲間の皆に言うことはないの？　もう戻ってこれないよ？　後で正気に戻って後悔しても遅いよー？　お別れしなくて大丈夫？」

メイアが気を使ってそう言うと、ようやくそれに気づいたと言わんばかりに鈴木がアキトの方を振り返った。

そして、にこりと天使のような微笑を浮かべると自信に満ちた足取りで歩み寄ってくる。

「そう言えば、一つ忘れていましたね……。アキトくん。これを受け取ってくれ」

「えっ……」

そう言うと、鈴木はまだ自分の手元に残っていたチケットの残り、その１２０枚ほどを差し出した。戸惑うアキトの手を取り、無理やりそれを握らせる。

「いい思い出なんかない場所だったが……君のおかげで俺はゴットカードを手に入れた。これはそのお礼だ。大したものじゃないが受け取ってくれ」

「……いいんですか？　苦心して貯めたものでは……」

「いいんだ。もう、俺には必要ない」

薄汚れたそれを手放すと、アキトの顔を見て言葉を続ける。

「もしかしたら、幸運が残っているかもしれないしね。……ありがとう。いつか君がゴットカードを引いて神の世界で再会できる日を願っているよ」

そうして微笑んだその表情は、わずかに姿が変わる前の鈴木を思わせるものだった。

そして、アキトの手を握り固い握手をする。その手は、先程の握手とは違い汗ばんでもなく、また鉱夫らしいゴツゴツして荒れた感触でもない、柔らかく、そして冷たい手だった。

「……それでは、ありがたくいただきます。……鈴木さん、どうか、お元気で」

「ああ、君も。……じゃあね」

そう言うと、鈴木は手を放し行ってしまう。

そうして、アキトの手元には、彼のチケットとその冷たい感触だけが残った。

「さあ、では行きましょう女神様」

「はいはーい☆　じゃーみんなぁ、今回はメイアのガチャを回してくれてありがと〜！皆のおかげで、とおっても楽しいイベント期間だったよ☆　ありがとうねー！」

「ああっ、メイア様っ、どうか行かないで！　やだああ！」

「ああああっ、俺も連れてってくれええ！　一人ぐらい多くても良いでしょう、頼む、こんな仕事もう嫌だぁ！」

女神との別れの時間がきたと気づいた鉱夫たちが口々に叫ぶ。だが、女神メイアはちっ

ちっちと指を振って笑顔で答えた。

「だーめ、連れていけるのはゴットカードを当てた人だけだよ！　皆もこっちに来たかったら、頑張って当ててね！　次のシーズンはぁ、伊良波謡ちゃんのゴットカードが大当たりだから頑張ってー！　絶対に参加してね、約束だよっ☆」

そう言うと、すっと鈴木の腕に自分の腕を絡め、女神メイアは空いている方の手を高く掲げ光を放ち始めた。

「じゃあ、皆に幸運の光があらんことを！　ゴッド☆ブレス☆ユー！　……ばいばーい！」

そして、その輝きが最高潮に達し、次の瞬間には、鉱夫たちの眼の前からメイアと鈴木は消えてしまっていた。

「……行っちまった……。はあ……信じられねえ……。夢見てるみたいだったぜ……」

「女神様……ほんとすげぇ……。ああっ、あの輝きが頭から離れねえっ……。ちくしょう、また会いたいよぉ……。ああっ、あの野郎、羨ましいなんてもんじゃねえ！　ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう!!」

憑き物が落ちたみたいに肩を落とした鉱夫たちが、思い思いに言葉をこぼす。

気がつけば、プレイルームもきらびやかなステージから元の薄汚れたもの……いいや、あの輝きの後ではもっとくすんで見える部屋に戻ってしまっていた。

まさに夢見るような時間は夢から覚めるように終わってしまい、後には薄汚れた自分と

仲間、そして虚しい現実だけが残された。
「ああっ……俺が手に入れるはずだったのに……。あの野郎、ムカつく、ムカつくっすよお……ちくしょうっ……」
「……俺は、虫じゃない……虫じゃ、ない！　取り消せよっ……取り消せよ、あの野郎っ……。あああああっ……ちくしょう、ちくしょおおっ……」
ネズミと豚面が、悔し涙を流しながら吠える。あまりにも惨めな姿だった。
ガチャを当てた者と外した者。この世界において、両者にはあまりにも無残な格差がもたらされる。
やがて、熱気に当てられていた鉱夫たちの頭も冷え、ついにはよたよたと三々五々散っていく。プレイルームには、ほんの数人が呆然と取り残されるだけとなった。
「……はあ。毒気を抜かれちまったな……なんだありゃ。ゴットカードってのはあんなもんか。思ってたのとは、相当違うな……」
「納得できませんでしたか？」
呟く指田にアキトが返す。指田は彼らしい大仰な動作で肩を竦めてみせると、つまらなさそうに答えた。
「ああ、まるでできんね。外見も変わる、おつむも変わる、生活も変わる。見たかよ、おっさんのあの喋り方。口調や言うことまで変わっちまってる。俺はあんなの、ノーセンキ

ューだぜ」
「そうですか」
「人間ってのはよ、てめえのままで成功するから意味があるんだ。なにもかも〝成功したビジョン〟にすり替えられちまったらそりゃもう自分じゃねえ。〝成功した何か〟に乗っ取られただけだと思う。俺は」
「……」
なんと言えばいいのかアキトにはわからない。鈴木の身に起きたことは、良いことだったのだろうか？　それとも悪いことだったのだろうか。
それを自分には決めることができない。アキトは、そう思った。
「それにな、なんだよ〝ゴットカード〟って。神が出てくるカードなら普通は〝ゴッドカード〟だろ。どういう意味なんだ、ありゃ？　うさんくせえったらありゃしねえ」
「そう言えばそうですね。考えたこともなかったです」
子供の頃から存在を知るそれの意味など考えたこともなかったが、たしかにそうだ。
ゴットカード。その名には確かな違和感があった。
「いつかゴットカードを当てて、願いを叶え残りの人生を謳歌するつもりだったが……路線変更だ。虫は虫らしく、森の中で美味しい樹液でも探すことにすっかね……」
そう言うと、指田はタバコを咥え歩き出した。その背中にアキトが言葉を投げかける。

「あなたなら、うまくやりそうですね」
「そりゃどうも……じゃあな」
感情のこもらない言葉でそう返すと、指田は行ってしまった。
それを見送ると、アキトはひとつ小さくため息をつき、やがて部屋の奥に鎮座するガチャに歩み寄った。
その残数は、鈴木が当たりを引いた瞬間から固まったように動いていない。
残り、14万ほど。そしてその画面には、ゴットカードを引かれてしまい、大半の人間にとって魅力を失った中身が虚しく表示されていた。
「……」
特に表情を動かさず、それに己のチケットを一枚投入する。それに気づいた鉱夫の一人、まだプレイルームに残っていた者が咎めるように声をかけた。
「おいおい、あんた！　なにやってんだよ、そのガチャもうほとんど当たりが残ってねえぞ。少ししたら新シーズンに入れ替わるんだぜ、いま回すともったいねえぞ」
「ええ、わかってます。けど、1日1回回すのが日課なんで」
親切心からかけられたであろう言葉にそう返す。アキトにとって一枚引きは仕事の後の決まった行事だ。何かがあろうと、回すことには変わりがない。
「はー、アンタ変わってんなぁ……。まあそれでも数百万ぐらいの価値があるらしいのは、

いくつか残ってるけどよ、どうせなら大当たりがある時に引くもんだろう。もったいねえなあ」
そう言うと、呆れた様子で鉱夫は行ってしまった。
その背中を見送りもせず、気負うところのない様子でアキトはガチャのボタンを押した。
するとほとんどタイムラグもなく、テテーン、と軽い効果音がなり、特に演出もなく、しゅっとカードが排出された。くすんだ灰色のカード。
最低のレアリティに位置する、レアリティNのカードだ。
いわゆるガチャのハズレ枠であり、大体が数百GPの価値しか持たないレアリティであり、そして……アキトの手の中のそれは、その中でも特に価値の無いものだった。
「……【ダンゴムシ】……」
レアリティNカード、【ダンゴムシ】。〝動物カード〟と呼ばれる種類のものであり、コールすれば中から一匹のダンゴムシが出てくる。
世にハズレカード数多あれど、その中でもとびきりで最低レベルのカードと言っていい。なにしろ、こんな虫そこらへんの石を転がせばうんざりするほど見つけられるのだから。
「……またこういうのか」
はあ、とため息を吐く。普通の人間ならば十年に一度レベルのカス引きであるが、これはアキトにとっては日常であった。

——そう、このアキト。ガチャ運が人生を決めるこの世界において、まさに致命的なことに……異様なほど、ガチャ運がなかったのである。

2

——むかしむかし。

と言っても、そこまで昔でもない昔。

まだ、この世界の人間が金属の武器を握りしめて殺し合いをしていた頃のお話。

ある日、この世界に女神たちがやって来ました。

女神たちは、この世界の人間がいまだ持ち得ない、たくさんの知識、素晴らしい技術、そして見たこともないような美貌を持ち、瞬く間に人々を虜(とりこ)にしてしまいました。

希望、幸福、勇気、知恵、幸運、愛、調和、そして歌。

八つの権能を持つ彼女たちは人々にたくさんの贈り物をしましたが、その中でもひときわ彼らを熱狂させたもの……それは、彼女たちが〝ガチャ〟と呼ぶ四角い箱でした。

曰(いわ)く、この箱には世界のありとあらゆる〝素晴らしい〟が詰まっている。

富、名声、美貌、強さ、恋、夢。その他、人々の望む全て。

そしてその言葉通り、その中からは、万の軍勢を討ち滅ぼす無敵の兵や、無数の知識が

刻まれた本、永遠に尽きない酒や空を飛ぶ乗り物など、女神の祝福が詰め込まれた素晴らしい宝たちが飛び出してきたのです。

それらは、四角いカードに封じられてガチャから排出され、人々はそれを合言葉とともに開放して自分のものとすることができました。

そうして人々はこぞってガチャに群がりました。熱狂し、奪い合うようにそれを回し、それは本当の奪い合いに発展し……やがて、人々はそれを使って戦争を始めました。

ガチャから飛び出してくる兵たちは人の何万倍も強く、人の身ではなしえない、世界の法則を無視したかのような不可思議な力を持ちます。

そのような存在を使って争ううちに世界は荒れ果て、大きく様変わりしてしまいましたが、人々は気にもとめませんでした。

なぜなら、いかに世界が荒れ果てようともガチャを回せば沢山の幸福が飛び出してくるからです。

こうして、それが世界に現れた日から、世界はそれを中心に回り始めたのです。

——これは、そんな四角いカードの中に閉じ込められたある世界のお話。

これから世界がどうなるかは、まだ誰にもわからない。

そう……それが、たとえ運命を司(つかさど)る女神だったとしても。

3

そして、鈴木が神の世界に旅立ってからわずかばかりの月日が流れた。

奇跡を目の当たりにしても、アキトたちの生活は特に変化することがなく、朝になれば労働に勤しみ、美味しくもない飯を食い、やがて疲れ果てて穴ぐらから転がり出てくる。いつもどおりの生活がそこにあった。

「はー、今日も疲れたっすねえ……。良いこと無いなあ、ちくしょう。……ああ、俺のゴットカード……あの時当てられてたら……」

「おいおい、まだそんなこと言ってんのか？　あれからどれぐらいたったと思ってんだよ、いい加減諦めろって」

ガチャの設置されているプレイルームで、ネズミと手ぬぐいが酒を飲みながら言葉をかわしていた。

呆れた調子の手ぬぐいに頬を紅潮させたネズミが返す。

「だって、俺のだったんすよ!?　俺のチケット！　それを、あのおっさんが横取りして！　ちくしょう、ちくしょう！　絶対許せない！　呪ってやるっすよ、ちくしょおおっ……」

「お前のじゃなかっただろ……。鈴木のおっさんがアレ当ててから、悔しさで頭がおかし

くなったのか、いなくなっちまったやつもいるんだ。お前もいい加減切り替えろって」

頭の中で、記憶を都合のいいように改ざんしているネズミにツッコミを入れる。鈴木に虫呼ばわりされた豚面はすっかり精神を病んでしまい、いつの間にか宿舎からいなくなってしまっていた。

無理もない。自分の人生には決してあんな大当たりがやってこないであろうと考えると、正気ではいられなかったのだろう。

「まー悔しいのはわかるけどさ、お前にはまだ踊り子のカードがあるだろ。また慰めてもらえって。そんで、次のガチャを……おっ」

そこまで言ったところで、手ぬぐいがあることに気づいた。薄汚れたプレイルームの端に備え付けられているソファ。そこに、アキトが座っていることに気づいたのである。

彼は手元にある雑誌を見ながらも、ちらちらとガチャのほうを気にしているようだ。

「……よう、あんた。たしかアキトさんだろ。珍しいな、こんな時間にあんたがここにいるなんて」

「……ああ、どうも」

手ぬぐいが、缶に入った酒を片手に歩み寄ってアキトに声を掛ける。何かの雑誌を読んでいたアキトは顔を上げて会釈した。相変わらず、感情の読み取れない仏頂面だ。

「……どうして俺の名を？」

「ははっ、あんた前の騒動で鈴木のオッサンに助言してただろ。噂になってるぜ、自分で引いてりゃゴットを引けたかもしれないのにってな」
「なるほど」
不思議そうに問うたアキトに手ぬぐいが返事をする。どうやら悪目立ちしてしまったらしい。平穏を望むアキトにとってそれはあまり喜ばしいことではない。案の定、聞きつけたネズミが酒臭い息を吐きながら絡んできた。
「そうだそうだ、あんたのせいっすよ！　アンタが余計なことを言わなきゃ俺がチケット貰ってゴット当ててたんだっ……ちくしょう、この野郎！　返せ、返せ！」
「……すいません」
ポカポカと殴りつけてくるその手をそっと押し返す。めんどくさい。酔っ払いは嫌いだった。そこで、ふとガチャを見る。気にはなるが……少しぐらい目を離してもよかろう。
「それで？　あんた、何を読んでるんだよ」
「これですか？　カードの情報誌です」
問われ、自分の読んでいたボロボロの雑誌を見せる。表紙には大きく、〝世界の超絶最高レアリティカード集〟と書かれていた。
「……バトルカードの紹介雑誌か。それも、UR……最高ランクのウルトラレアやスーパーレア専門の」

「ええ。と言っても、詳細なデータはほとんどなくカード画像もイメージで描かれた粗悪なものですけどね」
バトルカード、とはガチャから出現する戦闘用のカードの総称である。コールすればそのカードごとに特殊な能力を有した戦士たちが飛び出してきて、持ち主の意思に従い戦ってくれる。人間を遥かに凌駕する力を持ち、今となっては世界の軍事を支配するカードたちである。当然ながらその能力は軍事上の機密であったりすることが多く、一般に広く知られていることは稀だ。
また、それらには労働ガチャで出てくるカードたちと同じようにレアリティが存在し、最下位のランクNからR、SRと続き、そして最高ランクがURとなっている。
ただし、労働ガチャにはその上に君臨するゴットカードという異例があるが。
「へえー、アンタこういうのが好きなのか。なるほど、バトルカードマニアさんってわけか……。どれどれ、ええと、このカードは？」
「……【剣の乙女】。バトルカードでも最高峰の力を持ち、また相当に有名なカードです」
雑誌を覗き込んだ手ぬぐいに、開いていたページに書かれていたカードについて質問され、アキトの声色が珍しく僅かな熱を帯びる。それは親しくない人間にはわからないほどの小さな変化だったが、アキトの口調は心持ち早口になっていた。
「世界大戦の折に、最後までこのヒナト本土防衛のため戦い続け、最後には沢山の民を救

って倒れたと言われるカードです。そのスキル、〈光輝湛えし星の聖剣〉は世界一有名なスキルと呼ばれ、一軍をも一薙ぎで滅ぼす威力だとか」

そう言うと、今までに何百回と見続けたそのページを愛おしそうに撫でる。そこには、美しい装飾の施された銀の鎧を身にまとった女性が輝く剣を掲げている絵とともに、判明しているそのデータが書かれていた。

【剣の乙女】

ＡＰ：３５０００　ＤＰ：３５０００

民を導きしかの乙女、輝く聖剣を手に永久にその護りとなるであろう――今は亡き王国の伝説

「……なんなんスか、このカードの名前の下に書かれてる、えーぴーとかでぃーぴーって」

手ぬぐいの逆側から雑誌を覗き込んだネズミが訪ねてくる。

アキトは煩わしさを感じた様子もなくそれに答えた。

「ＡＰとは、そのカードの攻撃力です。ＡＰ１が成人男性一人分の能力ぐらいって言われてます。つまり、このカードは俺たちの３万５０００倍の力を持ってるってことです」

「３万５０００倍!?　こんな可愛い女の子がっスか!?」

ネズミが驚愕の声を上げる。それはそうだろう。バトルカードが恐ろしく強いことは誰でも知っているが、こんな可愛らしいカードがそれほどの力を持っているとは普通は思わない。

「と言っても、これらはただの目安で、単純にそうってわけじゃないらしいですけどね。まあ人間が万単位で束になっても敵わないのがＵＲなんで、その中でも強いとされるカードならこれぐらいはありますよ」

少し嬉しそうにアキトが返す。

このカード、【剣の乙女】はアキトにとって憧れのカードと言っていい。

【剣の乙女】は〝六姫戦記〟と呼ばれるシリーズの一枚で、設定上は一国を治める〝姫〟であり、他に【槍の聖女】【盾の芳紀】などいずれも強豪ＵＲである同シリーズのカードが存在する。

バトルカードにはそれぞれ背景を同一とするシリーズという枠組みが存在し、その種類ごとに、所属するカードが機械であったり人間であったり、はたまた天使や悪魔、さらには凶悪な化け物であったりと多岐にわたるのだ。

「はー。単体でそれだけの力を持ってりゃ、人間の兵士が３万５０００人いるより凄いかもなあ。なるほど、人間同士による戦争が途絶えるわけだ。こんなのが飛び込んでくるんじゃ、馬鹿らしくて兵士なんかやってられんぜ」

「まあ、とはいえ彼女たちを使うのも人間なんですけどね。カード単体では大した力も発揮できないとか。人間がうまく操作して、初めてその真価を発揮できるらしいです」
バトルカードは、自分の意志ではたいしたこともできない。それをマスターと呼ばれる持ち主が操って指示を出すのである。
あくまでバトルカードは人を助けるもの、戦いは人間の意志によって起こる。
「でも、戦争で倒れたんでしょ？　もう世界には無いんすか、このカード」
「馬鹿、お前知らないのか？　バトルカードにも有効期限ってもんがあって、それが切れるか倒されるとまたガチャに戻るんだとよ。記憶も怪我も全部まっさらになってな」
とぼけたことを言うネズミに手ぬぐいが教える。労働ガチャからはバトルカードが排出されないので馴染みがないとはいえ、この世界の人間にとってそれぐらいのことは常識だ。
バトルカードとはたとえ倒れても、転生するように再びガチャに舞い戻り、次のマスターに引かれてまた戦いに挑む永遠の存在なのである。
「はー、じゃあこんなとんでもない存在が今も世界の何処かにいるんスねえ……。なんかあったら即死じゃないすか、俺らなんて。怖いなあ」
「そうですね。今も世界の誰かがこのカードを手元に保有しているんでしょう。今まさに戦っているかもしれない。これを見ていると、そういう世界の息づかいみたいなのを感じられて好きなんです」

「ふん……まあ、天上のお話だな。それこそ、この国を支配するレベルの人間の話だ。こいつを手に入れるには数億……いや、それこそ兆レベルの金が必要になるかもしれん。ほとんど生活費に使っちまって、年間１００万ＧＰも貯められない俺達にゃ縁のない話さ」
「……そうかもしれませんね」
手ぬぐいの言葉にアキトが抑揚のない声を返す。
どのようなカードでも等しくガチャから排出されたという女神到来期でもなければ、このようなカードは一般人が手にできるものではない。
「まー俺たちのガチャにはゴットカードっつー夢が入ってるっすから、そんなカードどうでもいいっすけどね。まあ、今期はもう出ちゃったけど……あれ？」
「あ？　どうした？」
言いつつガチャを覗き込んだネズミが声を上げる。安酒をちびちびとやっていた手ぬぐいが声をかけると、ネズミは残りのカード残数が表示されている画面を見ながら言った。
「いや、ガチャが回ってるんスよ。今期は、もう当たりのゴットカードが出たのに。それどころかめぼしい当たりもほぼ出ちゃってんのになんでだろ。カード残量がかなり少なく……うおっ!?」
そこまでネズミが言ったところで、いきなりアキトが勢いよく立ち上がった。
大柄の彼が急に動くと、ちょっとした威圧感がある。驚きの声を上げたネズミに、アキ

トは見たこともないぐらいの勢いで詰め寄った。
「……当たりは、何が残ってますか」
「えっ……えっ!?」
「当たりは、何が残っているかと聞いているんです！」
「ひゃあっ！」
アキトに肩をゆすられて、ネズミが悲鳴をあげる。驚いた手ぬぐいが横合いから助け舟を出した。
「じっ、自分で見りゃいいじゃないか……ああ、いい、ちょっと待て、どれどれ……。……〝秘書カード〟だとよ！　あと残ってる当たりは、ランクＳＲの〝秘書カード〟とかいうやつだけだ！　カード残数は……３００００ほど！」
「っ……」
その言葉を聞くやいなや、アキトはぱっとネズミを放し、慌てた様子でプレイルームを駆け出していった。
その姿を、二人は呆然と見送る。
「……なんなんすか、あれ……？」
「さあ……」
一方、部屋を飛び出したアキトは、慌てて自分の部屋に向かう。

しくじった、話し込んでる場合ではなかった。もう時間がない。事が動き出したのだ。
すなわち、この自分も勝負をすべき時が来たのである。
廊下を駆け抜け、自室の扉についたチャチな鍵を開け、薄暗い自室に飛び込む。その奥側、狭いベッドの下を覗き込むと、引きずるようにして手提げ金庫を取り出す。
慌ただしい動作でちゃちな錠のナンバーを合わせそれを開くと、中からは今までアキトが貯めたチケットのその全部、実に３０００枚ほどが姿を見せた。
「……」
学校を出て、十代で働き始め幾年月。夢を持つようになって幾年月。来る日も来る日も、いつかのために貯め続けたチケット。
それを、使う日が来たのだ。
「……よし、いくぞ」
それら全部を両手に掴み、部屋から飛び出す。
もう時間との勝負だ。狭い廊下を駆け抜けて、再びプレイルームに急ぐ。
アキトが息を切らして戻ってみると、そこにはもう誰も居なかった。
（好都合だ。ガチャに集中できる）
そのまま、どっかとガチャの席に座る。祈るように画面を確認すると、そこにはほとんどが残数０になった当たり表示の中で唯一、まだ1という数がついたＳＲ……秘書カード

の項目が輝いていた。

（秘書カード……秘書カード！　これこそが、俺の欲しかった一枚。俺が引くべき一枚！）

秘書カード、それはキャラクターカードの一種である。

コールすれば、中から自分専属の秘書が飛び出してきて、効果終了までの一年間、持ち主を補佐してくれるというものだ。

たいそう有能なカードらしいが、だがその主用途は別のところにある。

（そう、秘書カードの一番の用途は……〝カンパニー〟設立に必要だということだ）

カンパニー。その名の通り企業のことであるが、この世界では意味合いが少し異なる。

この世界においてのカンパニーとは、その土地や地方、ひいては国すら支配する存在のことを言うのである。

女神が到来した直後、ガチャは一種類しかなく、また引くためにチケットなども必要なく、そこからはバトルカードを含んだすべてのカードが排出されていたらしい。

つまり回すことさえできれば、何の力も持たなかった者がふとした瞬間に強大な軍事力を持ちえたわけであり、それを抑え込もうとした旧支配者、王や貴族というものはまたたく間に駆逐されてしまった。

そうして運良く強大なカードを引いた者、もしくはカードを操る技術の巧みな者たちがそれに取って代わるが、それもやがて、より強大な使い手が現れれば倒される。

目まぐるしく変わっていく支配者たち。戦いは尽きることがない。人々はその終わりの見えない争乱に辟易し、戦うしか能のない支配者たちにもうんざりし始めていた。

そんな時代にやがて台頭してきたのが、女神のもたらした知識や技術を元に新たなる道具を作り上げて世に広め、産業革命を生み出した者たち……すなわち、企業経営者たちだったのである。

（農業、工業、建築、造船……あらゆる分野で活躍した彼らは秩序の中で儲けを出そうとする論理的な思考を持つという理由もあり、地位を高め、やがて彼らが世界を支配するようになっていったんだ）

そうして力を蓄え発言力を持った彼らは、やがて女神との謁見にこぎつけ、彼女たちと交渉することでバトルカードを一種の隔離状態にすることに成功したのである。

すなわち、バトルカードは〝カンパニーガチャ〟と呼ばれる特殊なガチャでのみ排出されるようにし、それを引くためには女神が用意した新たなる貨幣〝GP〟を必要とするようにしたのだ。

カンパニーガチャは、企業の経営者にしか回すことができない。そして、国の覇権を握る戦いは企業同士による勝負で決める事となり、それは整備され、今日ではカンパニーVSカンパニー……CVCと呼ばれるものとなった。

すなわちこの世界に於てのカンパニーとは、企業の経営者であり、領土の支配者であり、

なにより戦国大名のようなものにあたる。そして、そのカンパニー経営者として自身を登録するためには、女神が用意した補佐役……秘書カードの所持が条件の一つとして定められているのだ。

（だが、秘書カードは高い……。それこそ買うとなれば一千万以上……下手をすれば、数千万GP単位の資金が必要になる）

アキトは、過酷なわりにそれほど儲けがいいとは言えないこの仕事を続けながら、爪に火をともす思いで貯金を続けていた。その額はちょっとしたもので、無論それは自身がいずれカンパニー経営者として世に出て行くために稼いだ物だ。

だがそのためには、秘書カードが必要不可欠。しかしそれを金で買ってしまえば自分の資金は大きく目減りしてしまう。それではカンパニー自体が成り立つか怪しい。

（だが……）

改めてガチャを見つめる。そこには、たしかに秘書カードの表示が今もまだ灯っていた。

（……今、秘書カードを当てればそれが手に入る。俺も、カンパニー経営者として世の中に出ていけるんだ……！）

この男、高槻アキトには夢がある。

一国一城の主、カンパニー経営者として身を立て、バトルカードを握りしめ、そこをのし上がり、そしていつか夢にまで見たURをその手に握る……それがアキトの夢だった。

アキトの父は、重労働に従事する人間だった。そして重労働ガチャからは、重労働を補佐する〝労働支援カード〟が排出される。

労働支援カードとはその名の通り、人々の労働を支援するカードである。使用すれば一定の期間、労働に必要な体力を補助したり技術や知恵を補佐したりしくれる。それは人々が少しでも楽に生活できるようにという女神たちの善意によるものだったのだが、しかし人はそれを悪い方に捉えてしまった。

すなわち、〝なんらかの労働支援カードを手にした者は、ずっとその仕事だけをしていればいい〟という考えが広まり、他の職業につくことを否定する流れが生まれてしまったのである。

さらに、このカードは手にした者のその子供にも引き継がれることが多い。

そしてさらにその子供にも、またその子供にも……。今日この世界に表向き身分制度は存在しないが、そのせいで人が継いだもの以外の職業につくことは難しい。つまり事実上の身分制度であり、庶民は生まれでほぼ人生における立場が決まっているようなものだった。

自分の人生を己で選択し、自分の欲するものを己の力で引き寄せたい。

そのために毎日チケットを貯め、金を貯め、娯楽も我慢しただひたすらに自分にその力を与えてくれるであろう、きらびやかなカードたちを夢想して日々を過ごしていたのであ

る。

とはいえ、アキトはガチャ運というものが壊滅的に悪い。たとえばガチャのランクは大雑把に、URを当てれば人生が変わるほどの価値がついてくる。

SRはばらつきが大きく、ネズミが当てたような、しばらくいい思いができる程度のものもあれば、もっと数千万の価値を持つものも存在し、場合によってはその生活をガラッと変えてくれる規模のものもある。

だがその下のランクRともなればそれなりに馴染みのあるレベルとなり、普通ならば人生に百回単位、運のいい者ならば千回単位で当選する程度の価値となっている。

だが、アキトの場合はそのランクRすら、それなりに長い労働期間で実にたったの一度しか当てたことがなかったのである。

（……しかも、その一枚もなんかよくわからない変な生き物が出てくるカード……。街のカード買い取り店に持ち込んだら「いらない」と一言で突っ返された……）

アキトにも、自分の運を信じてガチャに挑んでいた時期があったのである。だが、その結果は惨敗に次ぐ惨敗。やがてアキトの心は摩耗し、そして悟ったのだ……そう、自分には、恐ろしいほどにガチャ運がないと。

そうしてアキトは諦めた。

夢や秘書カードを、ではない。運でそれを当てることをだ。

たとえば自分が何か高等なものを手に入れようと思うならば、それはガチャの最後の最後、その底の一枚まで引かねばならない、と……そう確信するようになっていたのである。

そうして、アキトは時を待つことにした。ひたすらに貯蓄を繰り返し、チケットを貯める。来る日も来る日も、人が贅沢する日も、人が笑顔でガチャを回している日も、ぐっと唇を噛み締めてひたすらにチケットと金を溜め込んだ。

いつか……そう、いつか自分の人生をかけた勝負をするためにだ。あの毎日必ず一枚引く、という習慣は自分の心がガチャから離れることを防ぐためだった。

毎日、ガチャに関心を持ち続け、その状態を維持し、自分は時を待っているのだ、ということを忘れないようにするためだ。

毎日毎日、必ず賞品の表示を確認する。毎日毎日、それに関わる。

もしかして、そんな時はこないのではないか、と思う日があった。

お前などがチャンスを拾えるものか、と叫ぶ心の声に心臓が痛くなる日もあった。

（……だが……だが）

……時が、来た。

勝負に挑む時が、やってきたのである。

（……長い長い期間を、待ち続けた……。すなわち……〝ガチャの目玉がほぼ出きった後、少ない残数で秘書カードのみが残っている状態〟を……すなわち、今を……！）

今こそ、秘書カードを引くべき時だ。

この条件が万が一でも整うのではないかと期待して、アキトは今日プレイルームに詰めていたのである。

少し目を離して同僚と話し込んでいるうちにガチャが大きく動き出したことには焦ったが、それもどうにか間に合った。

今なお残数表示は動き続けている。世界の誰かが秘書カードを目指して自分と同じように貯蓄をつぎ込んでいるのかもしれない。

秘書カードはＣＶＣへの登竜門。〝誰にでも等しくチャンスを〟という女神の意向の元、それはあらゆるガチャに仕込まれている。そう、使わずとも売れば相当の金額となるそれを狙うライバルが、世界の何処かにいるのである。

……そろそろ投入を始めるべきか。焦りが生まれるが、まだ始める踏ん切りがつかない。

ガチャの残数は１８０００ほど。アキトの保有するチケットが３０００枚であることを考えれば、普通にいけばもう十分な勝算を持って挑めるところではある。

だが、アキトはためらった。自分の運で六分の一を引けるだろうか。……おそらく無理だ。

故に、待たねばならない。せめて、三分の一……つまり、残量９０００まで。

その数の根拠は、何ということはない。アキトは四人以上のジャンケンで勝てた例しが

ないが、三人でなら辛うじて勝ったことがあるからである。〝運〟という不可視のステータスを理解するには、そんなくだらない理由を頼りとするしかなかったのだ。

（……まだ、出るなっ……出るなっ……！）

ジリジリと心を焼かれながら、残量表示が減っていくのを見つめる。

１４０００。１３０００。残量表示はみるみる減っていく。今にも秘書カードが出てしまうのではないか。自分は出遅れてしまうのではないか。

いつでも投入を開始できるようにチケットを準備しながら、焦りを感じる。なにをやっている、飛び出せ。悠長に待っている場合か。このチャンスを逃せば、いつこんな事が起こる？

それは、もっと何十年も先かもしれない。その頃には、自分は年老いて戦うなんて無理だろう。急げ、急げ。早くいけ……自分を信じてみたらどうだ。

（ぐっ……ぐっ……！）

歯を食いしばって、心の声に抗う。まだだ。まだ、早い。俺には、まだ遠い。

それこそ、俺には最後の最後、その一枚を引くぐらいの覚悟で挑まなければ当たりなんて引けやしない……！

残量の表示が回る。１２０００。１１０００。もう少しだ。心臓が拡大と縮小を激しく繰り返す。１００００。まだ秘書カードは出ていない。そうだ、出るな、それは俺のもの

だ――。

……９０００。

「っ……」

飛びつくように、チケットの投入を開始する。

ガチャを引く仕組みは、至って簡単だ。専用の投入口にチケットを入れ、ボタンを押す。そうすると、少し時間が経ったあと排出口からカードが現れる。

だが、実はこの〝少し時間が経って〟が曲者だ。

時間がかかるのは、おそらく各地で同時に回されているガチャ同士の整合性を取るために必要な時間なのだろう。間違って、複数のガチャから貴重なカードを同時に排出しないため。おそらくそのためだ。

だから、同時に参加している人間が多いほど排出までの時間は長くなると思われる。そして、排出が終わるまで次のチケットは投入できないのである。

よって、３０００枚を一気に消耗することはできない。ほんの数秒の話ではあるが、毎回待ち時間が発生する。一度に投入できるチケットの上限は、10枚。出るカードも10枚。それを、投入し、排出を待ち、出たカードを排出口からのける。

アキトは、排出されたカードの確認などしなかった。排出口に手を添え、出たカードを即座に側の机に放り出しながら次のチケットを投入する。

そう、確認など必要ない。欲しいカードは、一つだけ。そして、そのカードはガチャに排出の有無が表示されている。

だから、手を止めるのはその表示が消えた、その時だけ。それでいい。

（来いっ……来いっ……）

たった、五秒にも満たない時間。その時間で、チケットが10枚消耗される。

10枚。アキトがその枚数を貯めるのに、五日かかる計算だ。

重労働ガチャは、その名の通り重労働への報酬なので、中身も他職業のものと比べてまあまあ良く、一日に配られるチケット枚数も多い。

それでも、10枚はけして軽い枚数ではなかった。

（来いっ……来いっ……！）

このチケットたちは、言わばアキトの命。人生そのものと言ってもいい。

持たざるものが、持つものに変わるために研いだ牙。懐中の短刀、貧者の一矢。

自分の人生を弾丸に変えて、古臭いリボルバーに詰め込むようなものだ。

撃ち手はヘボだ、弾数で勝負するしか無い。

残数表示が回る。自分一人で回すより遥かに早い。今まさに、自分と勝負している誰かがガチャの向こうに居るのだ。それも、相当の執念を持って。

無限にあるかのように感じた手元のチケットがまたたく間に消えていく。ガチャの残量

表示も止まることなく減少していく。８０００。７０００。６０００。まだ出ない。まだ出ない。……秘書カードは、まだ出ない。

（くそっ、どうなってるんだ……本当に、底の底にあるのかっ……）

焦りがごりごりと体をせり上がってくる。ふと、横目で机に放り出された排出カードたちを確認する。どれもこれも、Ｎカード……価値のないカードばかりだ。やはり自分の運は駄目なままだと確認する。

そしてその中には、相当数の重労働用の労働支援カードが含まれていた。

アキトには、それらがこちらに語りかけてくるように感じられた。「おまえなどが、ここから抜け出せるものか」「おまえに似合いの場所はここだ」そう、物言わぬ声が響いてくるようだ。まるで、呪いのように。

……弱い気持ちが生まれる。今、本当にここでチケットをこれ以上消耗していいのか。

待てば、もっといいチャンスが来るんじゃないのか。こんなこと、本当に意味があるのか。

それよりも、いっそチケットを売れば、それだけでちょっとした金額になる。売って素直に秘書カードを買う資金を貯めた方が良かったんじゃないのか？

今自分がしていることは、財産を捨てていることではないのか？　……愚かな。

（……違うっ！　勝負すべき時に、勝負しなきゃ一生このままだ……勝負しないやつに、

夢なんて見れるか！）

ぶんぶんと頭を振り、弱い考えを振りほどく。

雑念を持つな。だが。

（……半分っ……半分ぐらい、使い切ったっ……）

チケットの束は、すでに半分ほどになってしまっていた。ガチャの残数は……４０００。

まだ出ない。

「っ……」

身を焼かれる。ガチャと言う名の博打に、身も心も焼かれる。

ボロボロと、こぼれていく。自分のチケットが。

長い長い時を、様々な誘惑に耐えることで初めて積み上げることが出来る己の集大成。

努力の結晶、己の半身。己の持つ可能性の濃縮にして、未来への希望、夢への架け橋

……それが……溶ける！

溶けていく、ドロドロと。己の人生が、しみったれた生活への抵抗が。

……燃える溶鉱炉のようなガチャに吸い込まれ、全て焼きつくされていく……！

「うっ……ああっ……」

知らず、喉から嗚咽が漏れる。

涙が、流れそうになる。

なんで、勝負などしようと思ったのだろうか。自分は間違ったのではないか。選択を誤ったのではないか。

とめようにもとめきれない後悔が溢(あふ)れ出してくる。

それでも……回す。回し続ける。

それしかないのだ、自分はこの道を突き進むしか無いのだと……折れそうになる心を必死で支え、不毛の荒野のようなガチャをひたすら回し続ける……！

そうするうちに、ついにガチャの残数は１０００を割り込もうとしていた。

（……ここまで出ないとは、いっそ清々(すがすが)しいっ……。この秘書カードは、間違いなく性悪だっ！）

心の中で、とびきりの悪態をつく。それでも回し続けるしか無い。10枚投入。そして、また10枚投入。そして……。

「っ……!?」

次の10枚を掴(つか)もうとした手が、空を掻(か)く。驚いて、チケットを詰んでいたガチャの台を見ると……そこには、もう一枚もチケットが残っていなかった。

「なっ……。……嘘(うそ)、だろっ……チケット、き、れ……？」

呆然(ぼうぜん)と呟(つぶや)く。そんなバカな。こんなに早いわけがない。だが、たしかに積み上げていたチケットは全て消(き)え失(う)せてしまっていた。

……使い切ってしまったのだ。夢中で放り込んでいるうちに。

「……そん、な……」

力なく椅子にもたれかかる。そんな。ここまできたのに。

残数は、すでに５００もない。表示は今もどんどん減っていっている。秘書カードの表示も点灯したままだ。後少し……後、少し、だったのに。

「……負け、た……」

虚空を見つめ、呟く。ガチャの向こうの誰かは、ライバルが減ったと気づいているだろうか。……悔しい。悔しい。悔しい。

後、少し。後少しなのに。もう少し、入れる速度を加減していればまだ挑戦できたのに。

……俺は、負けた。

やはり、自分には当たりを引くなど無理だったのだ。

あと、ほんの百枚ほどでいい。手元にチケットがあったならば、まだ可能性があったのに……。

『……もしかしたら、幸運が残っているかもしれないしね……』

「っ！」

何かを思い出し、はっと身を起こす。
慌てて胸ポケットを探る。
そこには……お守りとして持っていた、鈴木の残したあのチケットが詰まっていた。
（……鈴木さんの残してくれたチケット……万が一、何かの事情で戻ってきたら返そうと思っていたものだが……）
それは、ひどくよれよれになったチケットの束だった。
あちこちに汚れが目立ち、シワや破れもある。泥がこびりつき、どれも綺麗には並ばない。
あの気弱な鈴木が、毎日毎日、少しずつ祈るように溜め込んだものだ。
……間違いない。今が、これを使うときだ。
「……使わせてもらいます。鈴木さん」
軽く空を見上げ、呟く。神の世界がそちらにあるのかは知らないが、今は関係がない。
そのチケットを10枚単位に分け、放り込む。残数は、すでに１００を切っていた。
（……これでも出ないっていうんだから、とんでもない奴だ。引けたら間違いなく俺の力になるなっ……）
そう己を鼓舞し、勢いよくボタンを押す。排出されたカードを放り投げ、さらに10枚。
残数が、減る。90。60。40。20。もう時間がない。もう、あと一回投入できるぐらいしか時間がない。
指が震える。先程まで簡単だった、チケットを掴む作業がうまくいかない。どうにか掴み、投入口に放り込む。こんな時に限ってなかなか吸い込んでくれない。
ようやく入りボタンが点灯したときには、もう、残数が……。
「……うおおおおおおおおおっ!!」
……叩きつけるようにボタンを押す。
そして。
アキトは、カードを、引いた。

4

「うわっ、なんすか、これっ!?」
酒の買い足しを終え、プレイルームに戻ってきたネズミが悲鳴を上げた。そこには、机からこぼれ落ちたNカードが一面に散らばっていたからである。
「うわっ、なんだこりゃ、Nカードだらけじゃないかっ……。どういうことだ、これ？……おっ」
続いてビニールの袋を下げた手ぬぐいが入ってきて、似たような反応を示す。カードを

踏まないように注意して中に進み、そして、ガチャの席に座ったままかがみ込んでいるアキトに気づいた。

「……おいおい、まさかこれ、全部アンタ一人で引いたのか？　酷いなこりゃ、ほとんどNカードじゃないか。チケット、何枚放り込んだんだよ。……おい？」

話しかけても、返事がない。不審に思ったネズミと手ぬぐいが顔を見合わせると、やがてアキトは彼らに背を向けたままボソボソと呟いた。

「……ずっと、思ってたんです。挑戦しても、多分無駄だって。……俺は、運が無い。人と同じレベルのものすら引けないって。俺は、屑運だ……やはり、ガチャは向いてないんだって」

「……あ、ああ……。ま、まあ、元気出せよ。ガチャなんてしょせん運じゃないか。落ち込むことないさ」

どうやらアキトが爆死（ガチャで大敗することを人はそう呼ぶ）したらしいと気づくと、手ぬぐいはぬるい笑顔でフォローに入った。他人が爆死した時は慰めるのが普通だ。

だが一方のネズミは、ニヤニヤと汚らしい笑顔を浮かべると小馬鹿にしたような声色で言った。

「まっ、そんなもんすよ。クズがいきなり大勝負したって勝てるわけがないんす。普通はね。まーあんたもこれに懲りたら身の程ってものを……」

「……でも」

ネズミの言葉を遮り、アキトが身を起こした。

そうして、嬉しげに、誇らしげに、抱きしめていたカードを掲げてみせる。そこには……。

「……最後に残った一枚を、俺は引けた。俺は……不運なんかじゃ、なかった」

たしかに、ランクSRのカード……【秘書カード：金銭特化NO．371】と書かれたカードが握られていた。

「……うっ、うおおおおっ！　SRカードじゃないか！　あんた、当てたのかよっ……」

「えっ、う、うそっしょ!?　俺でもSRなんてこの前の一枚しか当てたこと無いのにっ！」

手ぬぐいとネズミがわっと飛び込んできてそれを覗き込む。部屋の照明に照らされたそれは、たしかにSRの輝きをたたえていた。

「……」

アキトは、鈴木がゴットカードにしたように、そのカードを愛おしげに撫ぜた。人生初のSR。己の人生の、相棒となるべきカードだ。

【秘書カード：（金銭特化）NO．371】

私い、お金とかだぁ～い好き！　世界中の富が欲しいナッ！　――とある秘書カード

そのカードには、わずかにそれだけの情報が刻み込まれていた。

カードのキャラクターイラストの場所には、美しい銀髪の少女がこちらに向けて笑顔と共にウィンクを飛ばしている。可愛らしい顔だった。

「……たしかに、最後の一枚を引くぐらいじゃないと自分には引けないと思ってたけど……。まさか、本当に最後の一枚とはね」

そう、このカードはガチャの底の底。最後の一枚に埋まっていたものだった。ガチャのカード残数は見事に0を表示し、完全に沈黙している。

アキトのチケットすべてを賭け、その上をさらに積み上げてようやく届いた女。なんて高い女だろう。それだけに、すでにアキトはそれに愛着のようなものを感じ始めていた。

「あ〜も〜……！　なんなんすか、もう……！　なにSRとか引いてんすか!?　これだけやって当たりを引かない、それが底辺ってもんでしょ!?　もー……白けるなあ……！　こんなん引けるなら、十分強運じゃないっすか！　あーもー鈴木のウンコ野郎と同じぐらいむかつくっすよー!!」

激発したようにネズミが叫ぶ。言っている内容は完全に屑だが、今のアキトには響かない。

「そうですね、馬鹿な勘違いでした。もう二度と俺は、自分を不運だなんて思いません」

「……で？　それ、どうするんだよ。売れば結構な金になるんじゃないのか？　売って豪遊でもするのか」

感心した様子で手ぬぐいが尋ねる。たしかに秘書カードは、売れば相当まとまった金額になるだろう。ＣＶＣに挑戦したい奴はきっとごまんといる。売るのはたやすい。だが。

「いいえ、これは売りません。自分で使うんで。……〝コール〟」

「えっ？」

驚く二人を尻目に、何気ない動作でアキトは解放の呪文〝コール〟を唱えた。その瞬間、カードから閃光が放たれ、煙が漏れ出す。

そうして、それが収まった後には……カードイラストと全く同じ小柄な少女が、目を瞑ったままそこに立っていた。

「うおおっ……。これが秘書カードっすか……！」

「……」

ネズミが感嘆の声を上げる。少女はやがて目覚めるように目を開けると、一同をくるりと見回し、少し思案げな顔をした後、突然に勢いよく右手を振り上げた。

「……いいいやっほう！　ご使用ありがとうございます、マスター！　私こそは、金銭特化秘書にしてお金の申し子！　あなたに巨万の富をお約束する、秘書カードの中の秘書カード！　その名もおおおおおっ……」

そして叫んだかと思うと、くるくるとその場で回りだす。呆然と見守る一同の前でやがて回転を止めると、びしり！とポーズを取りながら、

「キャロル・オールドリッチちゃんでーす！　あなたの財布をぉ……ぶちぬくぞっ♡」

と、飛び切りの笑顔で決め台詞らしきものを吐いた。

「……」

真顔になったネズミと手ぬぐいが、ポーズを決めたままのキャロルと名乗った少女をじっと見つめる。アキトに関しては、相変わらず表情が読めない。

誰も何も言わないまま時間が流れる。その冷たい沈黙の中、キャロルは、

（やべっ……滑った……）

と、引きつった笑顔のまま心の中で呟いた。

「……なんなんすか？　これ」

「そこっ！　これ、とか言わない！　敬意と尊敬を込めて、キャロル様とお呼び！　キャロル様と！」

呆れた声を出したネズミに、可愛らしい声を張り上げてキャロルが吠える。どうやらなかなかに愉快な性格をしたカードのようだ。

（さすが、ギリギリまで出てこようとしなかったカード。並じゃないな）

アキトはころころと表情を変える彼女を見つめながら心の中で呟く。

細身の彼女は銀色の美しい髪を後ろで編み込みおさげにしており、それが動き回るたびに猫のしっぽのように揺れる。

ふわりとした藍色のトップスに（なんという種類の服なのか、当然ながらアキトにはわからない）、妙に短くふりふりと揺れるスカートを穿いており、そこからは黒タイツに包まれた美しい脚がすらりと伸びている。

目元は猫を思わせる僅かな鋭さを持っており、身長は、アキトの胸にとどくかとどかないかぐらい。おそらく１５０センチほどだろう。そして、ついでに言えば……その胸は、実に平坦であった。

「……え、嘘だろ……？　これが、秘書カードなの……？　こんなのが？　……これが、一千万以上するの？　マジで？」

「だから、これとか言うな！　失礼な奴らねー！　そのうち、経済的に追い込んでやる！　主に借金とかで！」

呆然と呟くネズミと手ぬぐいにキャロルがキレ散らかす。とりあえず煽り耐性はないらしい。だがやがて自分を見つめるアキトに気づくと、テコテコと歩いてきて笑顔で手を差し出した。

「はーい、マスター！　初めまして、さっきも言いましたが、キャロル・オールドリッチです。今日から期限切れの一年後まで、全力であなたを補佐しますね！　どーんと信用し

て、財布とか預金通帳とか内臓とか預けちゃってください！　どーんと！」

「ああ。よろしく頼む。……内臓？」

そう答え、その手をにぎる。その手はとても暖かく、特別な感触を持っているようにアキトには感じられた。

……自分だけの、秘書カード。夢の、入り口だ。

「俺の名は、高槻アキト。好きなように呼んでくれ。……俺のもとに来てくれて嬉しいよ。君を、歓迎する。ええと……」

「あはは、よろしくおねがいします、マスター。私のことはキャロルでもキャロでもお好きなようにお呼びを。……ちなみに、歓迎してくださるというのなら形としてまずはダイヤのネックレスでも買ってくれたら早速好感度が爆上がりできっと私たちいい感じになれるとおも」

「今はそんなにお金がないからとりあえず言葉だけね。本当にありがとう、キャロ。君は最高だ」

なにか都合の良いことを言おうとしていたキャロの言葉を遮ってアキトが言葉を伝える。

……こいつ、好きにさせたらやべえな、という感想を腹に隠しながら。

（あー、優しいけど財布の紐はしっかり固いタイプかー。この手が一番攻略難しいんだよねえ。でも、いつかキャロルが貴方の口座をカラにしちゃうゾ☆）

キャロはキャロで、ニコニコ笑顔で物騒なことを考えている。つまりは、そういうマスターとそういう秘書カードなのであった。
「じゃ、行こうか。もうここには用がないし、辞表を出してくるよ。その後、大きな街まで出よう」
そう言うと、アキトが歩き出す。
その背中をとてとてと追いかけながら、キャロルが返事をした。
「はぁ～い！　ところで、私をコールしたということはぁ、カンパニー設立が目標～、で、宜しいんでしょうか？　ますたぁ」
「ああ、もちろんだ。まずは起業を目指す。よろしく頼む、キャロ」
「らじゃっ！　お任せください、なにしろ私は金銭特化の秘書カードですからねっ！　お金稼ぎは大得意っ!!　弱者からお金をだまし取ったり弱者から間接的に搾取したり弱者に自主的にお金を出させたりが大得意です！　もー頑張っちゃうぞ！　主に悪徳の方で！」
「……弱者からまくるのは程々にする方向で頼む」
などと益体もないことを掛け合いつつ二人は行ってしまった。
早々に気が合った様子の二人を見送り、ネズミが呆然と呟く。
「……なんなんすかねえ、あれ……」
「さあなあ……変わったやつだったからな。変わったカードと気が合うんだろうさ」

同じく呆れた様子で手ぬぐいが返す。本当に変な奴らだった。
だが……あいつらと自分たちとでは、これから生活が大きく違うものになるだろうということははっきりしている。
自分たちは、これからも何も変わらない日常を過ごし、一方のアキトたちはまるで違う何かを始めるのだ。それが、少しだけ羨ましかった。
「……まあ、でもあいつ、この大量のNカード忘れてったな。貰っちまうか」
「あ、そっすねー！　ほとんどゴミだけど全部売りゃ酒代の足しぐらいにはなるっしょ！　じゃあ、ありがたく……」
「ちょっと待ったぁー！」
二人がそこまで言ったところで、出ていったはずのキャロが再び部屋に飛び込んできた。
驚く二人を尻目に、凄まじい勢いで散らばっていたカードを拾い集めていく。
「あっ、ちょっ……」
「もーマスターったら大事なオゼゼの元であるカードを忘れちゃうなんてしょうがないなあー！　これはこのキャロちゃんがありがたくポケットにナイナイしてあげましょうねっと……うーん、安物ばっかり！　さてはあいつ、ガチャ運死んでんなー!?」
などとまくしたてながら、キャロはあっという間にすべてを拾い集めると、
「ではでは、今度こそさらば！　せいぜい君たちはしょぼくれた人生を楽しんでくれたま

えー。アデュー！」

と言葉を残し、猛烈な勢いで行ってしまう。

「……ほんと……なんなんだ、あれ……」

そうして、後には呆然と呟く二人だけが残された。

――かくして、高槻アキトと秘書カードのキャロルは出会いを果たした。

はたしてそれがどのような結果を生むかはまだ誰にもわからない。

そう……たとえそれが、運命を司る女神だったとしても。

AKITO SEEMS TO DRAW A CARD

アキトはカードを引くようです

川田両悟

ILLUSTRATION よう太

ファースト・ドロー

機械仕掛けの神

AKITO SEEMS TO DRAW A CARD

1

「……おおー！　結構いい街じゃないですかー！　マスター!!」

仕事を辞め、山を下り、バスと電車を乗り継ぐこと数時間。

アキトとキャロは、この周囲でも特に栄えている街……鉱石車の街〝トヨマ市〟にたどり着いていた。

綺麗に舗装された道、行き交う沢山の人々、立ち並ぶ高層ビル、そして道路を通り過ぎていく多数の自動鉱石車。人口も数十万に上る大規模な都市だ。

自動鉱石車、とは内部にエネルギー鉱石を組み込んだ四輪車両のことで、それと反応する液体を補充することでエネルギーを生み出し走行する仕組みになっている。

この世界で一般的に車と言えばこの自動鉱石車のことで、今日では世界中で製造され何億という台数が存在し、それなりの収入があれば個人でも購入が可能な値段で製造されている（とはいえその新車は一台何百万ＧＰという値段で、アキトレベルがそう易々と買えるものでもないが）。

アキトが採掘していたエネルギー鉱石〝シルヴァメタル〟を組み込んだモデルも多く、このトヨマ市には採掘されたそれらの鉱石を買い取り車を製造する企業が多い。

特にトヨマ・カーズという現地企業は世界でも有数の自動鉱石車メーカーであり、この国の車、実にその半数をこの企業のものが占めるほどだ。

このトヨマ市は、そのトヨマ・カーズの関連企業やその家族、そしてそれを当てにした外食産業などが入り乱れる、周辺でも特に栄えた土地なのである。

「ふんふん、道路はちゃんと舗装され、建物も多く、外食産業も盛ん……うへへ、こりゃあ金を絞りがいがありそうな街ですなぁ……！」

周囲をキョロキョロと見回しながら、キャロがよだれを垂らしそうな顔で言う。

どうやら、彼女にとって世の中は金を引き出すための金庫のようなものらしい。

「久しぶりに来たが、また随分と印象が変わったな。さすがに都会は移り変わりが激しい」

見なかったふりをして、アキトが独りごちる。返事を求めたわけではないが、キャロは横合いから顔を覗かせ、ちっちっち、と指を振ってみせた。

「やだもうマスターってば、そういう言い方、田舎者っぽいですよぉ？　まーカード化技術のおかげで、建物を建て変えるのは簡単ですからねえ」

カード化技術。それも女神がもたらした奇跡の一つだ。

ガチャから出現する品は、カードの形で出てくる。ならば、品をカードに封じ込める技

術も当然ながら存在するのである。

と言っても、それを人が己の力だけでできるわけではない。一定の水準を超えた企業が申請をすることで、女神から専用の装置が与えられ、それを使うことでカードに様々な品を封じ込めることができるのだ。

たとえばそれを使って料理を封じ込めればコールされるまでそれは腐ることがなく、それどころか温かいまま取り出すことすら可能であり、家を封じればその後好きな場所にコールすることでその場所に建て直すことができる。

わざわざ土地に人が行きそれを建築する必要はない、工場などで組み上げてカード化して持ち運び、建設予定地でコールすればいいのだ。

とは言え、それには相応のコストがかかる。家や車といった高級品なら良いだろうが、日用品にまでやっていてはとてもではないが採算が合わない。故に、食料や日用品の大規模輸送というもの自体はきちんと機能している。

もしかしたら、それも女神が人の仕事を奪わないために配慮しているのかもしれないが。

……ついでに言えば、この装置では生き物を封じ込めることはできない。

それができるのは、女神たちだけだ。

「で、マスターとしてはこの街でスタートを切るつもりなんですか？　カンパニー経営者として」

「ああ。そのつもりだが……どう思う？」

無邪気な表情で訪ねてくるキャロに返す。アキトとしてはこの土地にこだわっているわけではないのだが、他にこれといった土地があるわけでもない。

俺の秘書が（そう考えてアキトは若干照れた。まだ〝俺の秘書〟という表現には照れがある）反対するのならば、別の土地を捜すこともやぶさかではない。

「うん……悪くないと思いますよ。上がってくる収益も十分でしょうし、逆に良すぎてあまりにも競争が激しいってこともなさそうですし。まあ、そのあたりはこれから調べてみることになるでしょうが」

思案顔で、キャロが答える。おそらく彼女の頭の中では、この市レベルならいくらぐらいの儲けを期待できるか、といった計算が忙しく走り回っているのだろう。

「でも、その前に……やらなきゃいけないことがありますよね？　ま・す・た・ぁ」

ぼうっと彼女の横顔を見つめていたアキトに、突然こちらに向き直ったキャロが妙に甘えた声で言う。

やらなければいけないこと？　なんのことだろう。

思いつくことはいくつかあったが、どれのことかいまいちピンとこない。

「……何の話？」

だからアキトは素直に尋ねることにした。するとキャロはフリフリとお尻を振りながら、

「やだっ、もうっ……マスターったら、私に言わせるつもりですかっ！　この、スケベッ！」
と赤い顔をしてアキトの背中をバンバン叩いてきた。……意味がぜんぜんわからない。
「もう、だったら言っちゃいますからねっ!?　でも、言ったからって私のこと、イケない子だって思わないでくださいねっ！　だからね、……その、ねっ……私、見たいんです……マスターの……〝アレ〟を……」
言いながら、モジモジと身をよじる。……なにを言うつもりだ？　アキトに動揺が走る。
まさか、この子……。
「そう、アレ……マスターの、いちばん大事な物……、禁断のアレ……人には決して見せない、秘密の花園……マスターの……」
「おっ、おい待て、街中だぞ！　なにを言おうとっ……」
周囲の道行く人々を見回しながら慌ててアキトが止めに入る。だが、キャロはそんなことお構いなしにアキトのお腹を指で軽くつつきながら、頬を染めたまま言った。
「よ・き・ん・つ・う・ちょ・う……見せてください」
「……はい？」
……預金通帳。預金通帳と言ったか。
……なんという紛らわしい言い方を……。
「キャッ、言っちゃったあ！　もうやだ、私ったら！　いえ、そうそう見せられるものじゃないのは分かってるんですよ、でもほら、今後一緒にやっていくにはやはり残高を把握しておく必要があるというか、なんていうか、その運用も一緒に考えなきゃいけないじゃないですか？　それにそれに……！」

「いいよ、通帳を見せるぐらい。秘書に確認してもらうのは大事だろうし。はい」
「ヒャッハー!!　預金通帳だあああ！」
どんよりした目で通帳を差し出したアキトの手から、キャロがそれをひったくる。
そうして勢いよく飛び退くと、ハアハアと荒い息をしながら、アキトに背を向けてそれをぎょろぎょろと興奮した様子で舐めるように確認しだした。
「おおおおっ……。結構、持ってんじゃねーか、アキトさんよぉっ……。はあっ、はあっ……へへっ、エロい通帳しやがってっ……。たまんねぇなあ、中身パンパンじゃねーかっ。ああっ、使ってやりてぇ……この溢れるような金を一気に散財してやりてぇなぁっ……」
（……大丈夫かなあ、こいつ……）
その様子を見ながら、アキトが胸中でこぼす。なんなのだろう、この異様なまでの金への執着は。言っていることもやってることもどこの変態だと見紛うばかりだ。
しかも、それを愛らしい外見と声でやるのだからなんとも言えない。……秘書カードとは、全部こんななのか？
「はー……堪能しました。ほんと、よくその歳でここまで貯めましたねぇ！　相当我慢し

たんじゃないですか？　正直、鉱夫の仕事もそんなお給料よくないでしょうに」
「まあね。働き始めて、ほとんど何かを買った覚えはないよ。目標が、あったからな」
少し照れて、そう答える。今まで人に貯蓄のことを話したことはない。笑われるのが怖かったからだ。「いつか起業するために貯金しています」なんて、なかなか鉱夫の身で人に言えるものではない。
身の程知らず、と言われるのが関の山だ。
「ええ～？　とか言って、ここで一回がばっとお金を落としてるじゃないですかあー。何を買おうと思ったんですかぁ？　しかも、その後同じ金額戻しちゃってえ！　何かを買おうとして思い直したんでしょ？　ええー、おい、はっきり言えよぉ、オラオラ！」
「あっちょ……やめて!?」
上気した顔のキャロが、がばっと背中からへばりついてきて、アキトの腹をわさわさ摩りながら言う。なんだこれは。完全にセクハラではないか。
気恥ずかしくなって、アキトが少女のような恥じらいの言葉を上げる。まさか世の中に通帳ハラスメントなどという行為が存在するとは夢にも思わなかった。
「中古車を買おうかと思って、結局我慢したんだよ……！　そろそろ通帳を返してくれ！　て言うか君、まさか持ち逃げしたりしないだろうな!?　秘書カードに資金持ち逃げされました、なんてことになったら俺は恥ずかしくて生きていけないぞ！」

「やだ、しつれーな。私はマスターを裏切ったりなんかしませんよ。そもそも、できないように設定されてますし」
通帳をひらひらと振りながら、キャロが答える。
「私達秘書カードには、世界の基本知識を予めインプットされると同時に、いろいろとプロテクトがかかってます。まず、マスターは裏切れません。また、自分の意思でマスターから逃げることもできません。自分の意思でマスターに損をさせるような行為もできません。秘書カードは、その存在あるかぎりマスターの味方です。ただ、まあ……」
そこまで言って、ニヤリとキャロが笑ってみせる。そうして、自分のスカートの裾をついっとつまんでわずかに引き上げたあと、
「私だけじゃなくて、私への行為にもプロテクトが掛かってます。具体的に言うと、過度の虐待、攻撃、及び性的な行為などが禁止されております。……だからぁ、幾ら私が可愛すぎるからって無理やり押し倒したりしたら、その場で私は〝割れて〟しまいますので、注意してくださいね……ま・す・た・あ」
と、煽るように言った。アキトは、わずかに顔を赤くして目をそらす。
〝割れる〟と言うのは、カードが破壊されることを言う。カードは普通、期限終了まで手元に存在するが、なんらかの理由で重大な損傷を受けた場合などは耐えきれずその存在が消えてしまうのだ。

その場合カードはもう元通りには戻らず、女神の元に去り、またガチャに仕込まれるのだという。

「……シチュエーションカードとかとは違う、というわけか」

「ええ、あれはただの現象ですから。個人のあれこれはないです。ですが、私のような秘書カードは一個の人格を持ち自分で考え動きます。あれらと違い、都合で動きを止めたりなんてこともできません。ですので、女神は私達を守る保護をかけてくれてるわけです」

キャロは自分の薄い胸に手を当てて誇らしげに言う。彼女にとって、自己を持つことには特別な意味があるのかもしれない。

「ああ、とはいえ、所詮はカード。ゆえに、使い捨てられるのも普通です。それも役目みたいなものです。ですので、何も同じ人間のように私を扱う必要はないですよ。私には、食事も睡眠も必要ないですし。……まあ、優しくしてくれれば嬉しいし、御飯を貰えれば美味しくいただきますし、マスターが私のためにたっっっかいプレゼントをくれるなら大歓迎しますけどね」

そういうと、またニッコリと微笑んでみせる。

「それに、私たちは割れれば記憶を全部失いますので。使い捨てられても、どれだけ傷ついてもそうすれば元通り、次の持ち主に握られるだけです。ですのでご安心を」

「……記憶を失う、か。聞いてはいたけど本当なんだな……じゃあ、もし君の期限が終わ

った後もう一度来てもらったとしても、もう俺のことは覚えていないのか」

「ええ、残念ながら」

さして残念でもなさそうにキャロが言う。キャラクターカードには必ず期限があり、それを超えれば手元からは失われる。その時に記憶も消されてしまうのである。

「……寂しいもんだな。君たちは毎回忘れてしまうんだから」

「ええまあ、なにしろ、記憶を引き継いじゃったら前の持ち主の個人情報とかもついてきちゃいますしね。現在の持ち主に求められたら、私たちはそれを黙っていられないですし、それにほら、せっかく手に入れたのに、そのカードが前の持ち主を引きずってたりしたら嫌でしょう？　引かれたからには、その方に尽くすのが私達の使命。それにぶっちゃけ邪魔だし、記憶なんて残らないほうが良いですよ」

特に思うところのない様子でキャロが言う。彼女たちにとって、それは当たり前のことなのだ。一年で記憶を失い、次に向かう刹那的な命。

そう考え、なんだかアキトは悲しくなってしまった。

「……嫌じゃないのか？」

「いいえ、別に。そういうものですし。私としては、その時その時でお金と楽しく戯れられたらそれで満足ですよ」

そう言うと、キャロは通帳をアキトに返した。

（……たった一年しか一緒にいられない、か。……なら、少しでもいい思いをさせてあげたいな）

そう思いつつ、自分の命綱である通帳を大事そうにしまうアキトを見ながら、キャロが続けた。

「たしかに、資金の方、確認させてもらいましたマスター。一千万ＧＰ超えの資金、さっきも言ったとおり、その歳にしてはたいした金額ですわ。私を引き当てた根性もご立派。ですが、その上で言わせていただくのならば……」

アキトの顔をじっと見つめながら、キャロがそこで言葉を切る。

何を言うつもりだろうか。ごくり、とアキトがつばを飲み込むと、

「……その金額で、今すぐＣＶＣに挑むのは無謀もいいとこですね。多分、半年以内に負けて全部失うことになると思います。生き残れる可能性は、まあ……10％あるかないかってとこじゃないですかね」

と、キャロはバッサリと斬り捨てた。

「……えっ……」

アキトに動揺が走る。……嘘だろ。ずっとＣＶＣを目指してやってきたんだぞ。

そして、ついに夢の扉が開いたと思ったのに……10％？

逆に言えば、半年後には自分のカンパニーが生きていない可能性が、90％……？

「……嘘だろ……？」

「残念ながら、本当です。はっきり言って、このヒナト国のＣＶＣに挑戦できる金額ではないですね。もっともっと貧乏な国の僻地なら十分でしょうが……多分、ここだとすぐに死ぬと思いますよ」

にべもない。酷い。

……そこまで難易度が高いのか。この国でやっていくのは。

「まあヒナトは世界でもかなり裕福な方の国ですしね。それに、この世で貧乏人がお金持ちになろうとすることは、とても難易度が高いんですよ。残念ながら、資金としての一千万程度は小銭と言わざるをえませんね」

「……マジか」

がっくりと肩が落ちる。どこかで、これから成功が待っていると確信している自分がいた。なにしろ、ついに念願の秘書カードを手に入れたのだからと。

だが、まさかその秘書カードからこれほど厳しい現実を突きつけられるとは。

「……俺が、たとえば優れたバトルカードの操作技術を持つマスターだとしても？」

「優れた操作技術を持ってるんですか？」

藁にもすがるつもりで言った言葉に、キャロが質問で返す。うぐ、と返答に詰まる。

見栄を張ろうかとも思ったが、無意味なので素直に答えた。

「……実は、まだまともにバトルカードを持ったことはないんだ……」
「あら」
キャロが、驚いた声を上げる。そう、バトルカードマニアのアキトは、だがまだバトルカードを持ったことがないのである。
レアリティNのカードならば、えり好みしなければ数万程度で購入できるので入手は容易だ。だが、アキトはどうせ手にするのならば初めてはR以上が良いと思っていた。
なぜならば、Nのバトルカードはただ力が強いだけで独自の特性などを持っていないが、R以上ならばカードによってはスキルと呼ばれる特殊能力を持っているらしいからだ。
様々な個性を持つカードたちの特別なスキル……。それは、アキトにとって憧れだったのである。
「……よくそれでいきなりCVC挑もうと思いましたね……。無謀すぎる……」
「うっ……」
キャロの指摘にまた肩が下がる。このままでは肩が地面に触れてしまいそうな勢いだ。
Nカードでもいい、それで練習を続けておくべきだっただろうか。だが、一年で消えるカードに投資をしていては今現在手元にある資金はもっと小さいものだっただろう。
「……だけど、誰だって最初はそうだろう？　最初は素人なんだ、でも皆それを乗り越えて駆け上がっていくんだ、いきなり実戦に飛び込むしか……」

「マスター。もしかして、〝ホルダー〟持ってなかったりします？」
言い訳じみたことを言うアキトの言葉を遮って、キャロが尋ねる。
〝ホルダー〟。聞いたことがある。たしか、〝カードホルダー〟の略だ。マスターたちはそれを持ち、カードたちを保護するのだという。
だが、それが今なんだというんだろう。
「あー……マスター、もしかしてそのあたり細かく調べずに目指してたんですか……。あー、なるほどなるほど、あんな山の中で仕事してたら世の中の情報から隔絶されちゃいますもんねえ。そっか、そこから説明が必要でしたか。すみません、秘書カードをコールするぐらいだから全部把握してるもんだと」
キャロが、納得がいったという顔で頷（うなず）いてみせる。
そうして、身を翻すと、
「よしっ、じゃあ最初にやることは決まりましたね！　マスター……まずは、最低限の装備を手に入れるところから始めましょうっ！」
そう言い、理解の追いついていないアキトの手を引いて歩き出した。

続きはMF文庫J『アキトはカードを引くようです』をご購入ください。10月25日発売です！
ISBN:9784040659152
スレ発フノベ4特設サイト：https://foraastory.kadokawa.co.jp/